株式會社名古屋製陶所	東區東芳野町	
名古屋水產市場株式會社	西區船入町	
野上式自動織機株式會社	中區御器所町	
矢作工業株式會社	東區七間町	
矢作水力株式會社	同	
株式會社八木商店名古屋出張所	中區仲ノ町	
同　丸永商店名古屋出張所	西區下長者町	
松村硬質陶器合名會社	東區千種町	
株式會社松坂屋	中區南大津町	
同　福谷商店	西區傳馬町	
福壽火災保險株式會社	中區新柳町	
福壽生命保險株式會社	同　南大津町	
不二見燒合資會社	同　老松町	

株式會社近藤紡績所	南區呼續町	
帝國撚絲織物株式會社	西區上名古屋町	
帝國酸素株式會社名古屋支社	中區江越町	
天龍木材株式會社名古屋支店	南區南大津町	
愛知時計電機株式會社	同　千年	
愛知織物株式會社	東區千種町	
株式會社愛知物產組	中區正木町	
愛知電氣鐵道株式會社	南區熱田東町	
株式會社安部幸商店	西區傳馬町	
淺井製材株式會社	南區千年	
秋田木材株式會社名古屋出張所	中區正木町	
亞細亞製靴株式會社	南區豆田町	
合名會社安藤七寶店	中區矢場町	

佐治タイル合資會社　東區中市場町
株式會社三綿商店　中區廣路町
名港倉庫株式會社　同　納屋町
名岐鐵道株式會社　西區西柳町
明治時計製造合資會社　南區明治町
株式會社明治屋名古屋支店　中區榮町
三井物產株式會社名古屋支店　同　天王崎町
三菱電機株式會社名古屋製作所　東區矢田町
三菱商事株式會社名古屋支店　中區南長島町
三菱重工業株式會社名古屋航空機製作所　南區大江町
御幸毛織株式會社　西區西志賀町
株式會社十一屋　中區榮町
合資會社清水組名古屋支店　西區澤井町

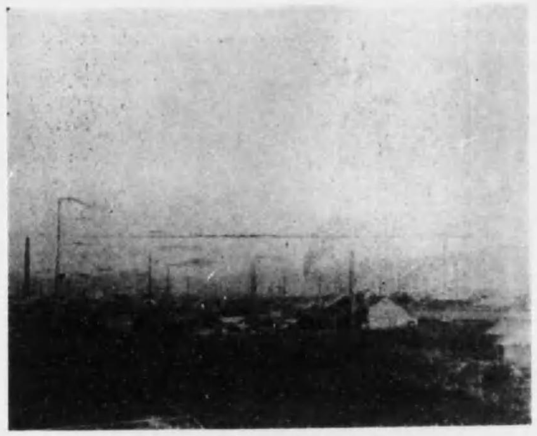
鈴木ヴアイオリン製造株式會社　東區松山町
名古屋綿絲布取引所　中區仲ノ町
高麗屋漆器店　同　榮町
榮屋　同

豊橋市

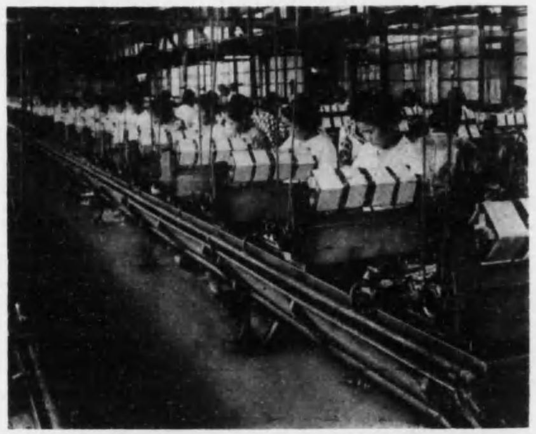
東海道線　豊橋驛
愛電線　豊川線・吉田驛
渥美線　新豊橋驛

人口十四萬三千を擁する三河第一の都會で、近年交通機關の完備すると共に商工業は倍々隆盛に赴き、蘭の取引市場としては全國第一と稱せられ、今や本邦屈指の產業地となつた。生絲、玉絲等の蠶絲類は工業中最も盛なるもので、好景氣時代に於ては生產額五千萬圓を超え、最安値に終始せる昭和七年に於ても二千三百萬圓を下らず、殊に玉絲の如きは本場上州を凌駕する程で、其の生產願は全國の約六割を占め、長野縣諏訪湖畔に於ける生絲と相並んで本邦製絲界の二大中心地をなしてゐる。是等製絲の大部分は花田の工場地帶に於いて生產されるので、此の地一帶は煙突林立して天日も暗き觀がある。特產物の竹輪、蒲鉾は品質の優良を以て知られ、また温室利用促成栽培は近年殊に盛で、優秀なるメロンやトマトを產出してゐる。此の他水產養殖

も盛に行はれ、鰻の如きは年額十六萬圓に達してゐる。



花田工場地帶



玉絲工場に於ける作業狀況

此の地は始め今橋と稱したが、大永年中吉田と改稱し、江戸時代には東海

道五十三次の一、吉田宿として殷賑を極めた。

明治二年今の名と改められた。其の後大正十四年の師團廢止、大正九年以來の蠶絲業の不振なぞ相當市の發展を阻害するかと思はれたが、戸口の如きは却つて膨脹して今日の隆盛を見るに至つた。

吉田城趾　木丸石垣の一部

吉田城趾

（關屋町）

城趾は市の北方豐川に臨む要害の地にある。此の城は永正二年牧野古白の創築であるが、翌三年田原城主戸田憲光に奪はれた。大永の初め古白の子傳藏は一旦之を奪ひ還したが幾何ならずして松平清康に奪はれ、それがまた天文六年再び戸田氏の有に歸し、更に同十五年今川義元の領有する處となつた。然るに永祿七年桶狹間の沒後は德川家康の手に移り、酒井忠次之を守つたが、天正十八年家康の關東移封と共に、池田輝政が岐阜から移つて十五萬七千石を領した。慶長五年輝政播州姫路に轉封の後は松平、水野等の數氏を經、寛延二年松平伊豆守信復が濱松から移つて七萬石を領し、世襲して維新に至つた。尋いで明治四年廢藩の際、樓櫓や外郭は取除かれたが内郭は陸軍省用地となり今歩兵第十八聯隊が屯してゐる。尙遺趾の見る可きものがある。

縣社　吉田神社

（關屋町）

祭神は素盞嗚命でもと天王社と稱した。天治元年の創立と謂はれ、牧野古白築城に方つて他の神社佛閣みな移轉を命ぜられたが、當社は城の鎭護として其のまゝ現位置に留り世々武將の厚き崇敬を受けたものである。

社寶には天文以來の棟札、古文書等を襲藏してゐる。七月十五日に行はれる例祭は吉田の祇園祭と稱して頗る古雅な祭である。舊時は社領三十石を有してゐた。

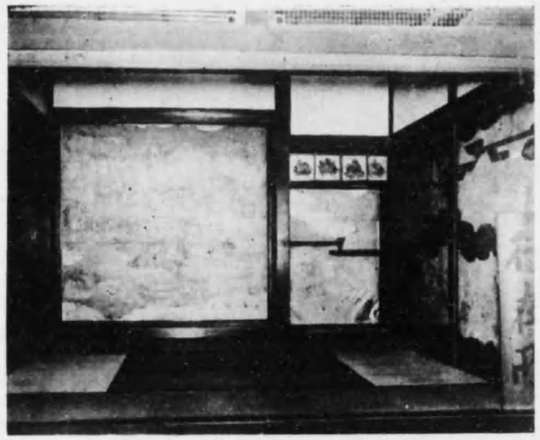
縣社神明社（中八町）

もと宮下町にあつたのを明治十七年二月今の所に遷座されたものであるが、牧野古白築城以前の鎮座と謂はれる此の地の最古の社である。毎年二月十五日に執行される例祭は俗に鬼祭と稱し、風俗の奇古な祭として知られてゐる。

維新前には朱印三十石を有し、明應以來の棟札を數多所藏してゐる。

悟眞寺（關屋町）

淨土宗に屬し、貞和五年善良上人が足利義詮に請ふて建立したものであるが、永正二年吉田城築造の際、寺域が城地となつて現地に移された。



悟眞寺大書院内御座の間

當時の大書院は御隱御殿と稱し、長篠の役に德川家康が此の部屋に隱れたと謂ふ。明治十一年十月明治天皇北陸東海御巡幸の際に此の書院が行在所となつた。御座所は當時のまゝで保存されてゐる。

高師原

むかしは高師山と稱し、南は太平洋岸から東は遠州濱名湖畔に及ぶ廣莫たる勝地であつたが、その後年と共に開拓せられて今は僅かに草山と小松原に名殘を留めて高師原と呼ばれてゐる。東海道本線は隆起する此の丘陵を横斷し、車窓の眺めに一段の趣を添へてゐる。

一帶の地層は洪積層で帶赤黃褐色の土壤から成り、土中に高師小僧と稱する褐鐵鑛を豐富に產する。之は樹根の周圍に酸化鐵が沈澱して生じたもので外觀小僧の形をなすところから此の名を得たのである。

大正悠記地方風俗舞歌

松風のこゑいやたかし高師山わけても今日は千世よはふらむ

主なる官公署、學校、銀行、會社

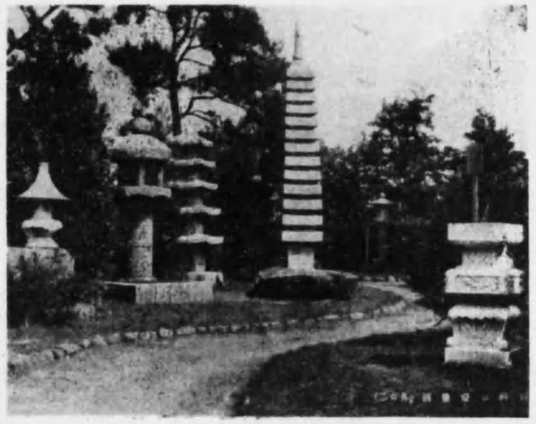
豐橋市役所	西八町	
豐橋聯隊區司令部	東八町	
步兵第十八聯隊	西中兩八町裏	
工兵第三大隊	同	
豐橋衛戍病院	同	
豐橋陸軍教導學校	畑町	

農林省水產試驗場豐橋分場	神野新田	
豐橋稅務署	東八町	
豐橋商工會議所	花田町	
蠶檢定所	同	
蠶業取締所豐橋支所	同	
蠶業試驗場豐橋支場	同	
豐橋土木工區事務所	西八町	
豐橋警察署	中八町	
愛知縣豐橋中學校	中柴町	
同　第二中學校	牛川町	
豐橋市立高等女學校	旭町	
同　商業學校	東田町	
私立豐橋盲啞學校	鍵田町	

豊橋實踐女學校	東田町
豊橋高等裁縫女學校	藤ケ丘
株式會社三河銀行	中柴通
同　三州貯蓄銀行	花園町
同　旭興產銀行	紺屋町
鳳來寺鐵道株式會社	花田町
豊橋電氣軌道株式會社	同
豊橋電氣信託株式會社	同
豊橋瓦斯株式會社	同
株式會社豊橋魚市場	魚町
豊川鐵道株式會社	花田町
豊川電氣株式會社	同
朝鮮蠶糸株式會社	東新町

株式會社川清商店	花田町
田口鐵道株式會社	同
マルケイ東海倉庫株式會社	同
福谷殖產株式會社	萱町
渥美電鐵株式會社	花田町
三州絹紡株式會社	本町
蠶絲周旋株式會社	花田町
水窪川水力電氣株式會社豊橋支店	東田町

岡崎市



石製品

東海道線　岡崎驛
愛電線　東岡崎驛・西岡崎驛
三河線　省營バス

七萬二千の人口を擁する都會で、歴史に回顧の深い地であると共に、近年商工都市として躍如たるものがある。

工業に於いては纖維工業最も盛で、蠶糸の二百九十萬圓、紡績の百三十七萬圓、綿織物の四百三十七萬圓等特に著しきものである。其の他八丁味噌は特異の佳味を有し、貯藏運搬にも亦極めて便利で全國的に販路を有し、煙火の製造も盛で、縣内生産額の四割を占めてゐる。

附近からは俗に岡崎石と稱する良質の花崗岩を産出し、石碑、石燈籠等の製作亦盛である。

縣社　伊賀八幡宮

（伊賀町）

文明年中岩津城主松平信光が安祥城を陷れ之に移つて後ち、岩津と岡崎の中間、伊賀河畔の地に氏神として八幡宮を齋き祀り、伊賀八幡宮と號した。代々岡崎城主の尊崇厚く舊時は社領四百五十石を有する城下第一の大社であつた。

境内は老樹多くその間に並び建つ本殿、拜殿、幣殿、隨身門は五彩を施して輪煥の美を盡し、石鳥居、神橋と共に何れも國寶に指定されてゐる。

岡崎城址

（岡崎公園）

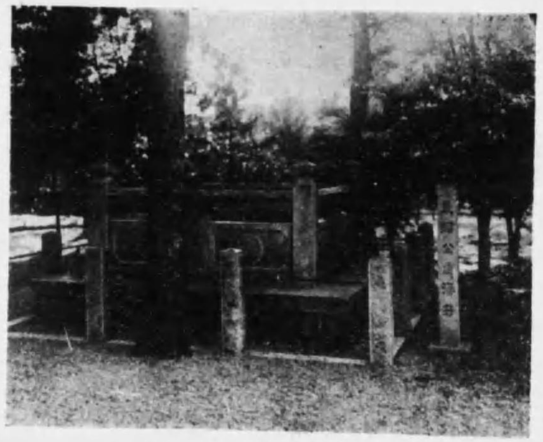
城址は矢作川と管生川が西南二方を取圍んだ丘陵の上に在る。大正八年舊

城主本多子爵より市に寄附せられて、今は市有の公園となつてゐる。本丸の跡には德川家康と本多忠勝を合祀する縣社龍城神社が鎭座し、二之丸跡には德川家康產湯井と稱するものがある。其の他蒼古の石垣、城濠、老樹など何れも往昔を偲ぶに足る。また近年數百本の櫻樹が植えられ花候には一段の異彩を添へる。

岡崎城址

この城は康正元年西鄕稠賴の築いたもので、當時龍城或は岡崎城と稱したといはれてゐる。其の後大永四年安祥城主松平清康移つて居城した。清康の子が廣忠で、其の子が家康である。

家康は天文十一年十二月二十六日此の城で產れ、六歲の時質となり駿河の大守今川氏の下にて成長した。永祿三年に至り、義元が桶狹間合戰で陣歿したので十數年振りで岡崎城に入ることが出來た。



家康產湯の井戸　岡崎城二之丸址

是より家康は此城を根據として、遂に德川幕府三百年の基礎を確立するに至つたので、德川氏にとつて最も意義の深い城址である。天正十八年關東移封の後ちは田中吉政入城し、慶長五年關ヶ原役後本多氏之に代り、正保二年には水野氏が吉田城から移つて居ること數代に及んで城の造營が全く完成した。

寶曆年間に至り下總古河の松平氏移つて居城したが、明和六年石州濱田の城主本多忠肅と交替し、忠肅の後は忠典、

忠顯、忠孝、忠民、忠直に傳へ代々六萬五百石を領して維新に至り廢城と共に城廓は取り壞されたが、遺蹟の大部分は破壞を免れ、天守閣阯には今尙ほ礎石が殘されてゐる。

菅生の川祭

（康生町）

菅生神社の川祭は毎年七月十九日の夜に行はれる。當夜は菅生の清流に數艘の鉾船を浮べ、三層の樓を築いて數百の提灯を點じ樓上に管絃を弄しつゝ流れを上下し、之に相呼應して壯者は船上より本場三河の粹を集めた各種の煙火を間斷なく打ち揚げ頗る美觀である。殊に金魚と稱する特種の煙火は恰も金魚の群るが如く鱗影閃々と流れを溯つて奇觀を呈し、數萬の群衆は兩岸に、或は急造の棧敷に置酒して之を觀覽するを例とする。

小豆坂古戰場

（美合町和合）

戰國時代に數度合戰の行はれた處で、いま小豆坂古戰場の碑石が建てられてゐる。最初の會戰は天文十一年八月十日今川義元が織田信秀に破れた戰ひで、信秀の將士津田孫三郎信光、織田酒造充信房、下方左近貞清、岡田助右衛門直敎、佐々木隼人正勝道、佐々孫助勝里、中野又兵衛忠則の七人が拔群の勇武を顯はし小豆坂七本槍と稱揚された。續いて此の復讐戰とも見るべき戰が同十七年三月十日に行はれ、義元は見事に信秀を擊破した。

一帶の丘陵地は松樹繁茂し、血草野なゞ稱する地もあつて、そぞろに往時の激戰を偲ばしめる。

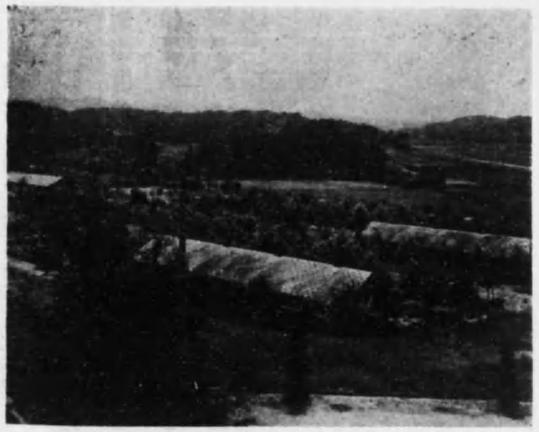
愛知縣種畜場

（美合町）

元農商務省愛知種馬所の跡を讓りうけ、諸般の設備を加へて大正十二年十月開場したもので、現在總面積は五十六町五反二畝歩を有する。

昭和五年以來特別會計となし、獨立豫算を以て育牛部、養豚部、產卵能力

檢定部、育羊部を設け各種試驗を實施してゐる。特色とするところは農業部を設けて有畜農業の經營を行ふこと、實習生養成部を設けて合理的有畜農業に從事する堅實な青年を養成すること等である。



農林省岡崎種鷄場

農林省岡崎種鷄場

（伊賀町）

昭和三年四月の創立で、同四年四月第一期新營工事の完成と共に業務を開始した。

敷地面積十五町四反餘歩、建物四十六棟を有し、其の取扱ふ業務は、1鷄の改良、蕃殖並飼養管理に關する事項、2孵卵及育雛に關する事項、3種雛及種卵の配付に關する事項、4鷄の產卵能力檢定に關する事項、5飼料作物の栽培に關する事項、6養鷄の指導奬勵に關する事項、7養鷄技術の傳習に關する事項等で、管轄區域は、富山、石川、福井、岐阜、靜岡、愛知、三重、滋賀、京都、大阪、奈良、和歌山の二府十縣に及んでゐる。

株式會社　三　龍　社

（六名町）

縣下有數の製絲工場で、本邦最初の優良蠶種「黃石丸」を完成すると共にまた日、歐、支の粹を採り、優良交配白繭種「三龍又」に成功した。而して之等蠶種は全國に配給せられ、蠶糸の生產額の如きも四百萬圓に達せんとしてゐる。

尙ほ本社は大正四年及び昭和二年に於ける御即位の大典に當り、兩度繪服調進の光榮に浴した。

主なる官公署、學校、銀行、會社、工場一覽

岡崎市役所	籠田町	
農林省岡崎種鶏場	伊賀町	
岡崎少年刑務所	康生町	
岡崎税務署	同	
岡崎商工會議所	連尺町	
愛知縣種畜場	美合町	
蠶業取締所岡崎支所	明大寺町	
臨時岡崎森林事務所	康生町	
岡崎木炭檢査所	同	
古部用水改良事務所	柱町	
岡崎土木工區事務所	康生町	
岡崎警察署	同	
縣立岡崎病院	同	
愛知縣岡崎師範學校	六供町	
同　岡崎中學校	明大寺町	
岡崎市立高等女學校	六供町	
同　商業學校	明大寺町	
私立岡崎盲啞學校	伊賀町	
株式會社岡崎銀行	傳馬町	
同　岡崎貯蓄銀行	連尺町	
中部電力株式會社	籠田町	
岡崎瓦斯株式會社	康生町	
妻木電氣株式會社	籠田町	
東海製菓株式會社	羽根町	

岡崎市	
岡崎織布株式會社	籠田町
東海製綱株式會社	連尺町
三河製絲株式會社	新川町
株式會社伊勢屋	兩町
株式會社三龍社本社工場	上六名町
同　針崎工場	針崎町
日清紡績株式會社岡崎工場	同
株式會社岡崎米穀取引所	康生町

一宮市

東海道線　一宮驛
名岐線　東一宮驛・西一宮驛

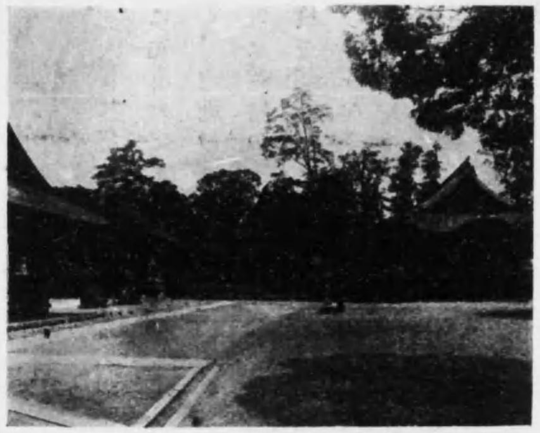
人口四萬四千を有する尾北第一の都會で、尾州織物の主產地として普く世に知られてゐる。近年交通、通信機關の整備すると共に商工業は倍々盛となり、會社數九十八、工場數三百三の多きを算ふるに至つた。產業の主なるものは織物の一千萬圓、蠶絲の百萬圓であるが、殊に毛織物の如きは近年縣營檢査が實施されて以來其の品質頗る向上し輸入品と殆んど遜色なき發達を示してゐる。

國幣中社　眞清田神社

尾張一ノ宮で、祭神は尾張國造の祖火明命である。市の中央に在つて、兆域一萬四千五百餘坪を有し、宏壯なる殿宇並び建つて深嚴を極め、熱田神宮

に亞ぐ大社である。

る。



眞清田神社　左ヨリ勅使殿・拜殿・本殿・右端ハ神樂殿

享德四年兵火のため社殿は燒失したが長祿元年再建せられ、永正、寛永兩度の修繕を經、最近に至つて大改築が行はれた。入母屋造の樓門と切妻造の西門は應永年間の建築と謂はれてゐる。神寶の主なるものは國寶の舞樂面十二個を始め、神鏡、刀劍、古鈴、高麗犬等で、他に美事な境内の古繪圖もある。

尙ほ四月三日に行はれる桃花祭は頗る大掛りなもので、神輿の渡御には數百の飾馬や警固の騎士が供奉して盛觀を極め

三八市場の狀況

綿、毛絲、染料、太物、古道具、家具、魚、鳥、家禽獸等百餘種に達し、市

三八市

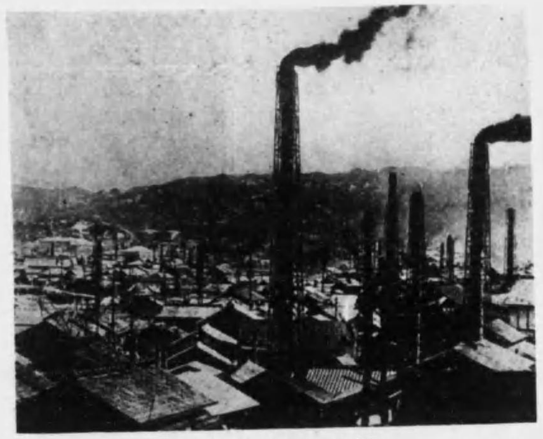
毎月三、八の日に開かれる市(いち)であるが、その起原は享保十二年のことで、當初の市場區域は中町、傳馬町に限られ、商品の如きも味噌、溜、米穀、青物等近隣農村部落の農產物集散に過ぎなかつたが、年と共に繁榮して地域も擴まり、現在では眞清田神社の門前を中心として西本町他十一ヶ町に及んでゐる。殊に門前、中町は肩摩轂擊の雜踏で、商賈の聲は蛙鳴のごとく喧噪する。營業種目は織物、絹、

場に往來する者、近郊はいふに及ばず、名古屋、岐阜を始め阪神地方、靜岡方面より遠きを厭はず蝟集し、一偉觀を呈する。

主なる官公署、學校、銀行、會社、工場一覽

一宮市役所	大字一宮	
農林省蠶業試驗場一宮桑園	野口町	
一宮税務署	大字一宮	
一宮商工會議所	南石野	
蠶業取締所一宮支所	大字一宮	
一宮土木工區事務所	同	
一宮警察署	同	
愛知縣一宮中學校	北園通り	
一宮高等女學校	宮西通り	
株式會社森林商店	七間町	
同　山一商店	大字一宮	
森菊毛織株式會社	一宮野黑	
長谷川毛織株式會社	大字一宮	
東洋紡績株式會社一宮工場	同	
大日本紡績株式會社一宮工場	同	
艶金興業株式會社一宮工場	同	
片倉製絲株式會社一宮製絲所	同	

瀬戸市



瀬戸市街を望む

瀬戸線　尾張瀬戸駅
省營バス

陶磁器が今日セトモノの名によつて代表されるごとく、瀬戸市の發展は全く窯業にかゝつてゐる。現在人口四萬を有し、煤煙は常に空を掩ふて自ら他都市と異る雰圍氣が漂ふてゐる。また家屋は築窯の關係上從來多く山腹に建てられてゐたが、近時石炭窯の隆興と共に漸時平坦部に進出して街衢を成すに至つた。

明治四十三年縣下に陸軍特別演習の行はれた際、東宮に在らせられた大正天皇には演習御見學の御途次、陶器學校へ行啓、親しく陶技を台覽遊される所があつた。

窯業

窯業の歴史は甚だ古く、其の起原は遠く奈良朝の世に遡ると謂はれてゐる。鎌倉時代に加藤春慶が宋の陶法を究めて歸朝の後ち此の地に良土を發見して窯を造り、此處に窯業の基礎を堅く築いて今日の瀬戸市を建設するに至つた。

春慶の作は後世古瀬戸と稱し頗る珍重されてゐる。その手法は爾後數代の間踏襲されて來たが、文明年間志野宗信は自己創案の意匠を此の地の工人に授けて茶器の製作をなさしめた。之を志野燒と稱し今に作法を傳へてゐる。永祿六年には織田信長自ら此の地を視察して陶業に保護を加へ、祖母懐土の濫採を防ぎ、その工人に對しては諸役免除の特典を與へると共に名工六人を選んで窯印を與へた。後世之を瀬戸の六作と稱してゐる。天正十三年には古田織部正重勝が意匠を瀬戸工人に授けて茶器の製作を托した。之を織部燒と

云ふ。かくのごとく瀬戸の窯業は絶大の保護と茶匠の指導に依つて名工輩出し一大躍進を見たが、慶長五年に至つて關ヶ原合戰の影響で不況に陥り、業を他國に轉ずる者漸次多きを加へた。然るに天下平定して德川義直封を尾張に受くるに及び美濃にある陶工を、此地に召喚して居宅、窯場を與へ、又補助金を交付し、課役を免じ、御燒物御用を指定するなど保護奬勵を加へたので、祖業は再び隆盛に赴き其の名聲は遽かに昂められた。

陶磁器製造狀況

尋いで文化四年加藤民吉が染付燒の磁器製法を創めたので、爾來陶業より磁業に轉ずるもの多く、相競つて其の技を研いて良工亦輩出した。

藩主は、その勞を賞して民吉に苗字帶刀を許して之に保護を加ふると共に、瀬戸燒を尾張藩の專賣品となし御藏元と稱する指定商人に製品の廻送をゆだねて專ら斯業の啓發に努めた。明治維新以後は藩の保護を離れて自營自立となつたが、之が却つて活動の自由を得て爾後一段の盛況を加へると共に交通、運輸、通信の發達に乘じて販路は益々擴張せられ、セトモノの名は遠く海外に及び、今や生産額一千二百萬に垂んとしてゐる。

焚き休むかまどの上や春の月　　卓池

加藤春慶と其の碑

（瀬戸公園）

名は景正、晩年薙髪して四郎左衛門春慶と稱した。藤四郎は略稱である。傳に依れば春慶は建仁三年大和國諸輪莊道蔭村に生れ、後山城の深草に住んで土器を作つて自ら樂しんだが、唐土製のものに比して遙に遜色があり、殊に釉藥を用ふる法を知らなかつたので苦心焦慮、その研究に耽つた。

偶々曹洞宗開祖元禪師が入宋すると聞いて大いに喜び、彼地に隨徒して製陶の技を學ばんと禪師を九州に追ふてその從者となり、在留六年にして遂にその秘法を極め、安貞二年禪師と共に歸朝し、爾來諸國に良土を求めたが、何れも意に叶はず漸く此の地に會心の陶土を得て此處に居を定め製陶の業を始めたとある。春慶は極めて寡作であつたと稱し、今その作品として此の地に傳へられるものは深川神社所藏の國寶狛犬のみである。

加藤春慶碑

春慶に關する傳へは甚だ稀で、其の遺趾も確實に認め難いが、晩年の閑居と所いはれる此の地に彼の墓と稱する五輪塔が殘つてゐたので、慶應三年同地の陶工加藤景登が、當時の明倫堂督學阿部伯孝に撰文を依頼して其の自筆の銘文を彫した六角陶製丈餘の陶祖春慶翁碑を墓前に建て、永く遺德を顯彰した陶製の碑はまた碑そのものとして珍らしいものである。

深川神社境内の陶彦社は里人が春慶の恩惠を德として祀つたもので、毎年四月十九日には盛大な祭典が行はれる。

印所に於ける粘土採掘作業狀況

印所の粘土採掘

製陶の原料である粘土は往昔から市の附近各所に産出するが、就中此の地に採掘されるものは木節、蛙目と稱して全國にも珍らしい優良な粘土である。

此の採掘所は從來瀬戸陶磁器工業組合に埋藏の儘拂ひ下げて採掘せしめてゐたが、その採掘は秩序を失ひ、跡地整備は行はれず、屢々誤掘をなすなど縣有產物の保護管理上種々支障を生じたので、大正十五年より縣直營をもつて統制ある採掘を行ひ、採掘したる粘土は組合の手を經て一般需要者に配給し、製陶業の圓滑なる發達を圖つてゐる。

砂防事業

市の中央を東西に貫通する瀬戸川の水源地に於ける山林は、陶土の濫掘燃料の濫伐に依つて逐年荒廢し、而かも風雨の侵蝕するにまかせられてゐたゝめ降雨毎に多量の砂礫流出して漸く水害を頻發するに至つた。明治十一年本縣は之れが對策を講じ、國營に依る砂防事業を申請して一部の工事に着手したが、事業は數年後に休止せられた。その後は本縣に於いて僅かに之れを維持する有樣であつたが、同三十三年根本的計畫を樹立し、爾來巨額の縣費を投じて年々工事の完成につとめたので、近年は松樹著しく繁茂して美林となつた。

萩御殿と稱する地域は東宮にあらせられた大正天皇の明治四十三年の秋、工事台覽の場所で紀念碑が建つてゐる。

主なる官公署、學校、會社

瀬戸市役所
商工省陶磁器試驗所瀬戸試驗場
賴戸警察署
瀬戸少年院
愛知縣窯業學校
愛知縣瀬戸高等女學校
瀬戸陶器株式會社

愛知郡

鳴海町

愛電線　鳴海驛

人口一萬二千を有する郡内の首邑で、名産鳴海絞の特産地として知られてゐる。此の絞り染は慶長十五年名古屋城造營の時細川家の醫師三浦玄忠が此の地に留まつて製法を傳へたといはれ、最近砦平に開祖三浦之碑が建てられた。斯の業は今に盛で其の生産額八十萬圓に達してゐる。

此の町は東海道五十三次の一驛として繁榮したものであるが、往古は北方古鳴海が交通の衝に當つたといはれる。

附近に東海一を誇る鳴海球場がある。

鳴海絞り作業狀況

ので、織田氏は之に對して鷲津、丸根の兩砦を築いて今川氏の大高城に對抗

夫木集

なるみ潟汐干に浦やなりぬらん　上野の道をゆく人もなし　景綱

鳴海かた潮のみちひの度毎に　道ふみかふる浦の旅人　讀人不知

桶狹間古戰場

（豊明村大字栄）愛電線　桶狹間驛

永祿三年五月駿河の大守今川義元が大兵を率ゐて上洛を企て、織田信長の奇襲に遇つて一敗地に塗れたる古戰場で東海道に沿ふた三方丘陵に圍まれた窪地である。

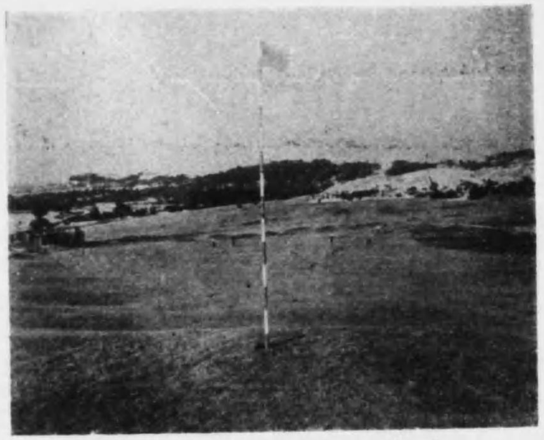
當時今川氏の勢力は尾張に伸びてゐた

してゐた。そこで今川勢は先づ丸根、鷲津を攻め落し、五月十九日義元自ら大高城に進まんとして此の地に陣營を張つた。信長は僅か三千の兵を從へ自ら陣頭に立つて奇襲を試み、義元に無慘な最期を遂げしめたのであつた。

桶狹間古戰場　右に見ゆるは古碑

此處には今川治部大輔義元墓と刻した古碑の立てる墳丘があり、其の東方約十間のところに尾張藩の儒官秦鼎の撰文にかゝる文化六年建設の桶狹間弔古碑がある。又松林の中に士大將墓と稱する五基の小碑があり、西方の丘上には今川方の部將松井兵部宗信の墓もある。尙ほ東北字前後の丘上には今川方士卒二千五百有餘の遺骸を埋葬したと傳へる戰人塚

がある。



和合ゴルフリンクス

和合ゴルフ・リンクス

（東鄕村大字和合）　乘合自動車

縣道擧母街道に沿ふて名古屋市東方十哩の地點である。

面積十六萬四千坪で、コースは頗る變化に富み、米國のバイン・バレーコースに相似するといはれ中部日本隨一のゴルフ場である。

音聞山

（天白村大字八事）　乘合自動車

八事丘陵の東端にあつて遠く伊勢、美濃の連峰を模糊の間に望む景勝の地である。

明治二十三年陸海軍聯合大演習の行はるゝや、同四月二日畏くも明治天皇親しく此處に諸軍を御統監あらせられ、越えて大正二年十一月十三日陸軍特別大演習に當り重ねて大正天皇の御野立所となつた聖蹟である。今記念の櫻が植えられ「御統監之所」と刻む記念碑が建てられてある。

大正四年大嘗祭悠紀地方風俗歌

君か代を千代もとよはふ松風の音に絶えせぬ音聞の山

長久手古戰場

（長久手村）　乘合自動車

天正十二年織田、豐臣の兩軍が小牧山に對陣するに當つて、豪放な秀吉と思慮深い家康とがこゝに雌雄を決しやうとした。その勝敗は孰れに歸するか逆睹しがたいことであつた。ときに豐臣方の部將池田信輝が家康の本據岡崎

を衝かんと企て却つて家康の爲めに大敗した處である。秀吉は秀次を主將とし信輝及び森長可を之に從はしめ、更に堀秀政を援軍として出發せしめた。家康は小牧山に在つたが牒して之を知り、先づ大須賀康高、榊原康政、本多康重を發せしめ、自ら織田信雄と共に進發した。

五月九日、兩軍は此の地に衝突し、數刻に亘る激戰に豐臣方は信輝父子、長可を始め多數の士卒戰死し、遂に家康方の勝利に歸した。

一帶の地は丘陵起伏し、老松散在する處に池田勝入及び之助戰死の碑があり、稍離れて森長可の碑がある。附近には家康が本陣を置いた富士ヶ根始め色金山、岩崎城阯、首塚などこの戰ひに關した史蹟多く、そゞろに懷古の情を唆るものがある。尙ほ色金山下の安昌寺には此の戰役に關する記錄がある。

東春日井郡

小牧町

名岐線　小牧驛・新小牧驛

小牧町はもと小牧山の西南麓にあつて清洲街道に沿ふ一宿驛であつたが、元和九年藩主義直の命に依つて現地に移されたといふ。人口一萬三千を有しこの地方に於ける商業交通の中心地である。

主なる官公署、學校

小牧稅務署　蠶業取締所小牧支所　愛知縣小牧中學校

小牧山

（小牧町）

小牧町の西端にある標高八十五米の山で、鬱蒼として樹木に包まれてゐる。山上に立てば遠く勢濃の巒峰や飛信の連山を展望し、景勝の地點である。

永祿年中織田信長は美濃攻略に備ふるため、此處に城を築いて清洲より移つたが、稻葉山を襲つて齋藤龍興を走らしめるに及んで、本據を其處に移し、此處は勢ひ廢城となつた。

尋いで天正十二年三月豐臣秀吉、織田信雄と隙を生ずるに至り、德川家康は信雄に味方して此の山の遺構を修築して之に據つた。四月に入つて僅かに姥ヶ懷に小衝突があつたのみで兩軍待機の姿勢となり、長久手の一戰に於いて家康勝利を得るに及び遂に十一月和議が成立し城砦を毀ち爾來全く廢墟となるに至つた。

小牧山南方より見る

德川時代に於いては尾張藩の管理に屬し諸人の入山を禁じたが、明治六年

に至つて本縣は之を小牧公園として公開し、同二十二年再び舊主德川侯爵の有となり登山に制限が加へられた。昭和二年以後は小牧町が管理する事となつて公開せられ、同十一月陸軍特別大演習の縣下に行はれた際、その十八日畏くも今上陛下親しく御登攀あらせられた。今史蹟に指定されてゐる。

（篠岡村大字大山）　中央線　高蔵寺驛＝乘合自動車＝自動車

大山廢寺塔阯

本堂が峰の中腹にある。長徑一・四五米、短徑八八糎、表面に輪廓の彫込ある心礎と自然石の礎石十六個が原位置に存し、附近に奈良朝時代の遺瓦が散在してゐる。嘗ては銅佛が發見されたこともあり、いま史蹟に指定されてゐる。

密藏院

（篠木村大字熊野）　中央線　鳥井松驛＝自動車

天台宗延曆寺末で、嘉曆三年僧慈妙が此の地に來つて當寺を建立し、七堂

伽藍を營むだものである。當時は尾張、三河、美濃を始め十一ヶ國に亘り數百ヶ寺の末寺があつたが、中古は亂世のために遠國の末寺とは關係が絶たれ、寺門も衰頽したと謂はれてゐる。文祿四年豊臣秀吉寺領を寄附し、德川氏に至つても同樣寺領を與へた。元和五年名古屋城内三之丸に東照宮が造營せらるゝに及んで、住持珍祐が其の別當に補せられ、爾來明治維新に及び神宮寺が廢せられるまで、兩寺兼帶で、その上城内の將軍家代々の靈廟をも管理してゐたから、德川時代に於ける此の寺の勢ひは大したものであつた。

本尊樂師如來は古くからの靈佛で、多寶塔と共に國寶に指定されてゐるが、其の他に佛像、古文書、佛畫類を多く藏してゐる。

龍泉寺

（志段味村大字吉根）瀨戸電線　小幡驛‖乘合自動車

勝川の流れに臨んだ丘上に建てられ、廣濶な平野を視野に抱く景勝の地である。寺は天台宗に屬し尾張四觀音の一である。本尊は寺内の多羅々池より出現された馬頭觀音と謂はれ、龍神が一夜のうちに堂舍を營んで供養したものて龍泉寺と名づけたと謂ふ。

天正十二年長久手合戰のとき豊臣方の陣所となつて諸堂宇や寺寶が悉く烏有に歸したが、慶長三年僧素純が之を再興し、元和三年には藩祖義直より寺田の寄進もあつた。

所藏の木造地藏菩薩立像は嘉元元年無住作の銘があつて、仁王門と共に今國寶に指定されてゐる。

森林公園

（旭村、志段味村）　瀨戸電線　三郷驛‖白動車

名古屋市郊外に未だ森林の自然美を利用する公園がないので、縣は本郡旭村から志段味村及び瀨戸市の一部に亘る八百餘町歩の縣有山林の美化計畫をたて、一大森林公園を設立することになつた。

此の地は瀨戸電鐵と中央線に挾まれ、尙ほ東方の縣道には省營バスの利便

もあつて交通に惠まれた上、なだらかに起伏する丘陵とその間に散在する幾多の池沼とが融和して自然の景勝地をなしてゐる。從來此の森林は消極的治水事業が行はれたのみで直ちに公園とすることが出來ないので、三ヶ年計畫を以て昭和九年度より保健衛生、慰安施設、風致樹の植栽等に着手して完成に努めることゝなつてゐる。

玉野川と定光寺

（品野町）　中央線　定光寺驛

勝川の上流を玉野川と云ひ、景勝を以て稱へられてゐる。殊に鹿乘橋の附近から上流の定光寺に渡る城嶺橋までの間が趣致に富み、春は兩岸に隆起する山々の花と新綠に埋まり、秋は紅葉の豊潤な色彩に包まれ、清冽な河水は巨石に沮まれて狹く、或は廣く流れ、奇岸を嚙んでは白波を擧げてゐる。此の風景は幽邃な趣に乏しいが、劫つて極めて明るい朗かな感じの溪谷美を有する。城嶺橋附近の定光寺山は恰も京都の嵐山に髣髴たるものがあり、料亭茶店など更に風趣を添へてゐる。

玉野川　高藏寺附近

城嶺橋を越へて山裾より谿谷を縫ふて密林の畫猶寂しき五六町の山路を登れば定光寺の本堂に達する。

定光寺は建武年間處齊平心によつて創建せられ、曆應四年に至つて完備した一大道場であつて、その後一時衰退したが慶安三年喝堂之が再興に着手し、承應元年に至つて完成した。之より先き元和年間藩主義直が遊獵して始めて此の山に登り、四圍の展望に富む景勝を愛して廟地と定め、爾來屢々此の山に遊んで寺門再興に力を添へたが、慶安三年五月江戸藩邸に薨ずるに及んで遺命によつて遺骸を此寺に葬つたものである。舊時は寺領三百五十石を有し、境地の勝と共に早

くから名刹として世に知られた。所藏の銘助重、銘守家の太刀二口は佛殿と共に今國寶に指定されてゐる。其の他の寺寶も亦尠くない。

義直の廟宇は寺後の山上に在る。承應元年夏竣工したもので、明の歸化人で義直に仕へた陳元贅の經營になつたと云はれてゐる。獅子門を入ると其處に磚の敷かれた支那趣味の拜禮所があり、更に進んで唐門を入ると封土の上に陳元贅の書にかゝる二品前亞相尾陽侯源敬公基と刻した支那式の位牌形の墓碑が立てられてゐる。また墓側の一段低いところには殉死した家臣五名と其の臣四人の墓石がある。

德川義直廟

西春日井郡

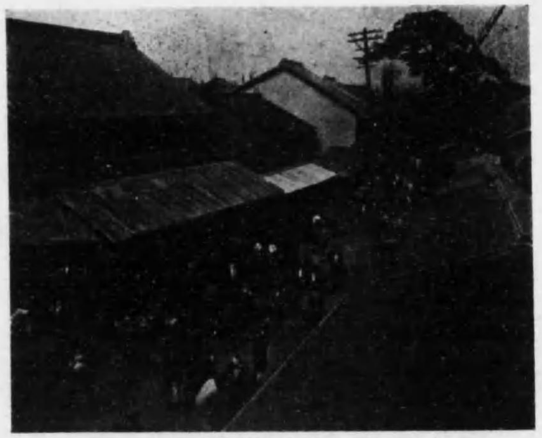
西枇杷島と青物市場

東海道線　枇杷島驛
名岐線　西枇杷島驛

もゝ琵琶島とも書いた。治承のむかし、尾張井戸田に謫流された藤原師長が後ち許されて歸洛のとき、愛する横江某の女に此處まで見送られたが、女は惜別の情に堪えず「四ツの緒のしらべも絶えて三瀬川沈み果てぬと君に傳へよ」と辭世の歌を殘し、かたみの琵琶を抱いて河水に身を投じたと傳へられ、その遺骸を琵琶と共に葬つたといふ琵琶塚には今辨財天が祀られてゐる。

此の地は美濃路を經由して中仙道へ通ずる街道筋に當るので、元和八年藩祖義直は庄内川に巨大な橋を架設した。大橋の長さ七十二間、小橋の長さ二十七間で悉く檜材を用ひ維新前までは車の通行を禁止した。大橋小橋間には南北に長い島があつて枇杷島を東西に分け、景勝の地として諸家の吟咏も尠

くない。



西枇杷島青物市場狀況

この風景と共に古來有名なのは蔬菜青物の市場である。

此の市場は德川初期に於ける問屋三十八軒を維持し、幕府と尾張藩の保護の下に二百餘年の間市場營業權を獨專して明治維新に至つたもので、現在一ヶ年の取扱高は五百萬圓に達し、中部日本に於ける蔬菜果實市場として首位にある。

此の市場の特色は仲買人の存在せざることで、即ち蔬菜果實は問屋から直ちに小賣商若くは消費者に渡り行くことにあつて、之が當市場の誇りとするところである。遠近より蝟集する數千の人々

の雜沓と車輛數千の轟擊する喧囂のさ中に亂れ飛ぶ如き果菜集散の迅速な光景は眞に奇觀である。

市人にこの笠うらう雪のかさ　　芭蕉

宮重大根

（西春村大字落合字宮重）

東海道線　稻澤驛より乘合自動車

宮重大根は古く慶長の頃から尾張地方に廣く栽培され尾張大根と稱されてゐるが、特に此の地のものは優秀とせられて此の名が冠せられた。現在の生産高は三千三百貫に上つてゐる。

維新前に於いては藩侯より御所及び幕府へ献上したと謂はれ、風味の美なることは全國第一とされてゐた。然るこその後奸商が宮重大根の名を僞稱して粗惡なる種子を販賣し、宮重の聲價を失墜せんとしたので、明治四十年頃農會の附帶事業として採種組合を組織し、爾來種子の改良統一に努めた結果

その業績著しく揚り、現在その年産類三千五百石に達してゐる。

清洲町

東海道線 清洲驛
名岐線 清洲驛

もと城下街として繁榮したものであつたが、慶長十五年遷府と共に町家も亦名古屋に遷り街衢は概ね田畑と化した。當時の落首に「思ひよらざる名古屋が出來て花の清洲は野となるふ」とあるを見てもその變化が如何に急激であつたかが想像される。

現在人口四千五百を有し、附近一帯は蔬菜地の主産地として知られ、また養鶏盛で其の飼養總數は三萬五千羽に達してゐる。

主なる官公署、銀行

愛知縣農事試驗場清洲分場、愛知縣種畜場清洲分場、株式會社清洲銀行

清洲城趾

清洲城趾

（清洲町大字清洲）

城趾は町の西南五條川畔にある。

此の城は應永年間尾張の守護斯波義重が始めて築き代々家臣に之を守らしめた。其の後四代の孫義統が天文二十二年家人織田信友に弑せられたので義統の子義銀は織田信長に援を求めた。そこで信長は柴田勝家を遣して信友を誅し、義銀を本丸に置いて自ら二之丸に移り住した。然るに永祿年中義銀は三河の吉良義安と密かに謀つて信長を

害せんとしたので、信長は之を追放して自ら本城に據ることになつた。越えて天正十年信長京都に弑せられて後は第二子信雄が城主となり、其の後豐臣秀次、福島正則と相次いで居城し、慶長五年に至つて德川家康の御四子松平忠吉が武藏の國から此處に轉じ、同十二年忠吉の歿後家康の第九子義直が甲斐より移り、五十二萬石を領して此の城に居住した。

かくの如く此の城は足利の初政以來尾張の治城であつたが、外廓は五條川にとりまかれて屢々氾濫するので遂に遷府の令が發せられ、慶長十五年二月名古屋に移されて廢墟となつた。其の後ち年と共に荒廢して遺趾は殆んど失はれた。今城趾として見る可きものは東海道本線によつて二分せられた以東の地に舊本丸趾と稱する一堆の岡丘があつてその上に二基の碑がある。一つは弘化年中清洲代官武田晨業が五條川の底から掘り出した古城の遺石を以て「右大臣織田信長公城跡」と刻み、いま一つは文久二年林國次郎の建てた「清洲城墟碑」である。舊本丸及び二の丸とも思はれる地域は大正十一年清洲公園として保存することゝなり今日に及んでゐる。

新川の開鑿

庄内川水源地一帶の山地は林木に乏しいため、降雨毎に河水が氾濫し、殊に明和四年七月には猿投山の崩壞によつて土砂流出し大洪水となつたので、藩主德川宗睦は自ら里民の窮狀を視察し、藩吏人見彌右衛門、水野千之右衛門に命じて之が救濟策を講ぜしめられた。千之右衛門は專ら工事に當り、味鋺堤長さ四十間、幅二十間を五合目まで切り下げ溢水を大蒲村の沼に落し、喜惣治、比良の間を堀割つて西に流し、海部郡榎津を經て海に落す巨川の開鑿に成功した。世に之を新川開鑿の御普請といふ、爾來庄内川增水の調節をなすと共に惡水疏通の便をもたすけ、沿岸の住民は全く水害から救はるゝに至つた。比良新橋の附近には有志者に依つて建てられた頌德の一大碑石がある。

丹羽郡

布袋町

名岐線　布袋驛

人口凡そ八千を有し、附近に養蠶、農業が盛である。産業の生なるものは綿織物で其の生産額は二百二十萬圓に達し、蠶糸の如きも二十萬圓に上つてゐる。

主なる官公署、學校

布袋警察署、縣立蠶業試驗場、愛知縣丹羽高等女學校

木津用水

此の用水は藩祖德川義直が命じて開鑿したものと謂はれ、犬山町の木津から木曾川の水を堰入れ、丹羽、葉栗、東西春日井の四郡二十三ヶ町村を潤すもので、南流して大口村大字小口に於いて三流に分れてゐる。古木津用水は小牧町を過ぎ、西春日井郡を經て新川に至り、新木津用水は其の東方樂田村及び味岡村を經て鳥居松村に至つて八田川に合し、又勝川町に於いて庄内川に合流する。

五條川用水路は大口村より岩倉町地内に至り矢戸川に合流する。

古木津用水は流程六里、新木津用水は之より稍短く、五條川用水約三里で其の灌漑面積は五千三百餘町歩に達してゐる。

國幣中社　大縣神社

（樂田村）　名岐線　樂田驛

尾張二ノ宮で本宮山の麓に鎮まり、大縣神を祀る延喜式神名帳の名神大社である。社傳に從へば垂仁天皇二十七年の鎮座で、天武天皇の朱鳥年間再建し、清和天皇の貞觀中修理せられたが、永世元年火災に罹り、同十五年に織

田久長によつて再建されたといふ。

現在の本殿、祭文殿及び廻廊は萬治三年藩主光友の奉建で、舊時は社領二百石を有してゐた。

本宮山は標高二百九十三米を有する尾張第一の高峰で頂上に大縣神社の奥宮が祀られてある。眺望の佳絶と山姥に絡む傳説を以て知られてゐる。

大縣神社

入鹿池と尾張富士

（池野村）

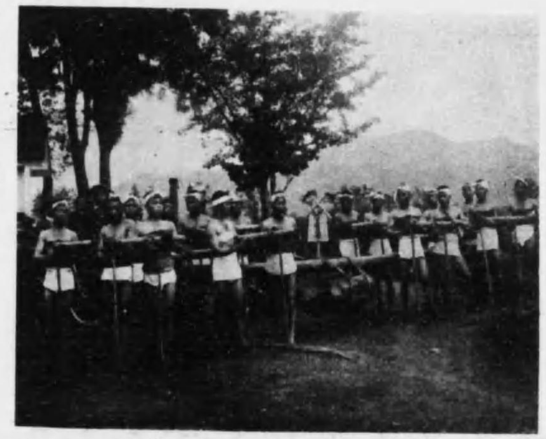
名岐線　羽黒驛‖乘合自動車

入鹿池はもと虫鹿庄入鹿村といひ、早くから拓けたところで安閑天皇の朝には入鹿屯倉が置かれたと傳へられてゐる。慶長の頃江崎善右衛門外五名の者は此處に堤を築いて湖沼を造れば必ず尾張平野に灌漑の利便を得られようと、時の藩主義直に建言し裁許を得て、寛永七年工を起し同十二年に全く完成した。爾來丹羽、東西春日井三郡の三十二ケ村は嘗く此の恩惠に浴して開墾地も八百餘町歩に達した。その後明治元年出水の時堤防決潰し被害は丹羽、春日井、中島、海部の四郡百三十三ケ村に及び名狀すべからざる慘狀を呈したが明治十五年に至つて漸く復舊工事完成し、現在その灌漑耕地は千六百餘町歩に及んでゐる。此の池は面積五十一萬坪、周回約三里を有し、四方山野に圍まれた柔らか味のある池で、四季の行樂地として多くの遊覽客を吸引してゐる。近時此の池を中心に大遊園地の計畫も樹てられ、目下着々事業が進められてゐる。

池の西に孤峰高く聳ゆる尾張富士は其の容姿の秀麗を誇り堂々と根を張つてゐる。標高二百七十七米で廣濶な山頂には木花開耶姫命を祀る大宮淺間神社がある。往古は富士大明神と稱し、修驗十二坊等あつて榮えたといふ。

舊暦五月晦日から六月朔日にかけて行はれる石上祭は天下の奇祭として知られてゐる。

石上祭は石を運んで山を高くすることが神慮に叶ふとの信仰から始められたものので、數名或は數十百名を以て一團を作り、木遣音頭賑やかに峻坂をついて頂上に大石、小石を擔ぎ上げる祭で夏祭りの雄を誇るに足る。又夕方より火祭が行はれる。即ち山頂から登山口まで百數十ケ所に煌々と大篝日を焚き、數百名の登山者が松明を振り廻しつゝ頂上から駈け降り、全員相亂れて火車の競技を行ふ豪快なものである。



石上祭

字西洞四十一番地に珍木ひとつばたごが生育する。之は木犀科の喬木で隋圓形の全緑葉が發生し、五月頃白色の細い花瓣の花が群つて咲く。朝鮮や亞細亞の東部に於いては珍らしくないが、日本では古來稀に見る植物で今天然紀念物に指定されてゐる。初め此の木は名が知れないので「なんじやもんじや」と云はれた。

犬山町

名岐線　犬山口驛・犬山驛・犬山橋驛

犬山の地は尾張平野の盡くる處、木曾川の兩岸に沿ひ、人口一萬三千を有し岐阜縣に通ずる要衝に當つてゐる。木曾川の絶勝が世に喧傳せられて以來觀光客陸續として集まり遊覽都市として著しき發展の氣運にある。近時上水道の完成、觀光施設の改善等新興氣分の潑溂たるものが見られる。

土地の名産に犬山燒と葱冬酒がある。犬山燒は元祿頃の創始で風流雅致に富み、葱冬酒は慶長以來家傳の秘法によつて釀造せらるゝ珍酒である。

主なる官公署、學校、會社、旅館

犬山警察署　犬山高等女學校　犬山乾繭倉庫株式會社　犬山ホテル
彩雲閣（旅館）　迎帆樓（旅館）

犬山城

犬山城は木曾の碧潭に臨む翠丘の上に高く白く輝き、普く天下に知られてゐる。

此の城は永享の初め斯波滿桓が現地の南方木之下に築いたのを、織田信康の時現地に移したと傳へられる。小牧戰役には池田信輝の襲撃を受け豐臣秀吉の入城を見た。慶長五年關ヶ原合戰の後ち德川氏の有に歸し、義直が尾張に封ぜらるゝに及んで傅平岩親吉が城主となり、次いで元和三年成瀨隼人正正成代つて傅となり、三萬五千石を領して城主となつた。爾來正虎、正親、正幸、正泰、正典、正壽、正住、正肥と繼承して明治維新に至り明治二年正肥の版籍奉還後、城郭樓櫓等悉く取毀たれ、僅かに天守閣を殘したのである。その後城地一帶が縣有公園となり、同二十八年舊藩主子爵成瀨正肥に讓渡し爾來成瀨家の管理に屬して公開されてゐる。

この天守閣はもと美濃兼山城のものを慶長年間石川光吉が木曾川を下して犬山に運び此處に築いたと謂はれてゐる。外觀は三層樓であるが、內部は五階となり、上層の四邊には勾欄が設けられてゐる。

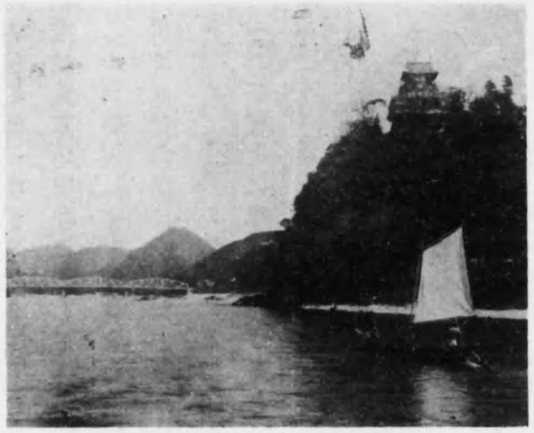
一たび樓上に登臨すれば遙かに惠那、駒ヶ岳、御嶽、伊吹等の重疊たる連峰を望み、近く濃尾の平野を一眸にあつめ、脚下に烟るが如き木曾の清流を俯瞰し、銀色の橋下を白帆の翼をひろげた扁舟が悠々上下する樣はさながら一幅の名畫である。

木曾川の峽谷

犬山より其の上流岐阜縣土田に到る間を、俗に日本ラインといふ。地質は

名岐線　犬山橋驛
名岐線　ライン遊園驛

古生層で主として角岩硅岩を以て構成され、赤、青、黑、白、黄の五色を呈する岩石は表面に甚だしく褶曲を生じ、それより風化して生ぜる岩塊が樣々な曲線を描いてゐる。これ等の奇岩は老獅子の咆哮するが如く、或は巨人の坐嘯するが如くに奔流に迫り、その姿は千狀萬態である。而かも其の水は飽くまで清く水量豐かで、一度上流より舟を驅つて激流奔湍を下れば風景の變化奇幻は眞に迎接の遑もないほどである。是等變化多い風景に慣れる頃、眼界は忽ち一轉して俄かに靜平な而かも汪洋たる大江が展開する。



木曾川と犬山城　上流を望む

鬱蒼たる丘上には犬山城が屹然と聳立し、碧潭にひたす容影はさながら鶴が双翼をひろげたやうである。

自然の美と此の壯嚴なる人工の粹に接して初めて日本ラインの眞價を知るのである。近年は鵜飼も行はれて一層の興趣が加へられてゐる。

古き城は立てり靜かに山上の若葉そよきの薫する雨に　　與謝野晶子

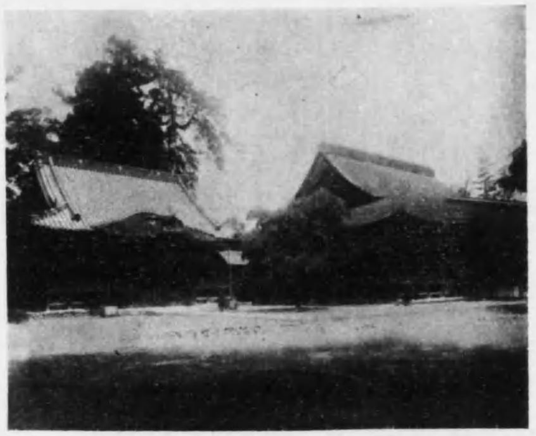
犬山の城の白壁さやかにもうつりて清し木曾川の水　　片野宅郎

葉栗郡

宮田用水

慶長十四年大野村（今淺井町）地内の木曾川堤防に長さ二十一間、高さ一間、幅二間の樋門を設け、水路を開鑿して木曾川を分流した。これが尾張に於ける最初の用水杁である。

寛永五年黑岩村（今宮田町）に移轉し、後ち數回に亘つて改造したが、明治三十四年に至つて從來の木造を煉瓦に改め、内法の高さ一間二尺、幅一間一尺及二間の二重樋とした。之を西元杁といふ。東元杁の樋門は寛永十九年の創設で長さ二十一間、高さ一間、幅一間半を有する。此の兩樋門を以て灌漑する區域は西春日井、丹羽、葉栗、中島、海部の五郡に亘り、其の面積は一萬二千七百町歩に及ぶ。



曼陀羅寺　右本堂左の瓦屋根は曼陀羅堂

曼陀羅寺（宮田町飛保）

名岐線　古知野驛＝乘合自動車

淨土宗の寺で、元德元年後醍醐天皇の勅に依つて創建せられ、初め圓福寺と稱したが、寛正三年曼陀羅の靈異に依つて今の名に改めたと謂はれてゐる。天文十年後奈良天皇から勅願寺の綸旨を賜はり同二十年織田信長伽藍を修理し、元祿元年豊臣秀吉も伽藍の修理を爲し寺領を寄附し、更に藩主德川氏より二百三十餘石の寺領を與へられた。

寺域は廣大で清楚閑雅の趣に富み、入母屋造檜皮葺の本堂や曼陀羅堂の他

古雅な堂塔が配置よく並び建つて尾北に於ける名刹たるに恥じない。

寺寶には書畫、古文書、古器物など多く、絹本着色の淨土五祖像と朝鮮鐘は今國寶に指定されてゐる。

木曾川堤の櫻

木曾川堤の櫻

東海道線　木曾川驛より乘合自動車

草井村、宮田町、淺井町、葉栗村、北方村の五ヶ町村に跨る木曾川堤防の櫻並木で、目通四尺以上のもの約三百本、總計二千本が數尺を隔てゝ植えられてゐる。樹種は彼岸櫻と枝垂櫻が最も多く、花候には長堤三里のあひだ、所々に花のトンネルを現出して頗る壯觀を呈する。

此の堤には初め松樹が植えられてゐたが、明治十七年河水氾濫して堤防潰壞の際多くは伐採せられ、同十八年改修工事の完成と共に櫻樹が植えつけられたものである。その後同二十四年の濃尾地震に甚だしく被害を蒙つたが、蘇堤櫻保勝會の大補植に依つて舊觀に復し、今名勝及び天然紀念物に指定されてゐる。

木曾川町

東海道線　木曾川驛

東海道線に沿ひ、木曾川を隔てゝ、岐阜縣に境して居る。人口一萬一千、尾西織物工業地帶の北部重要地點を占め、工場數百三十の多きを算ふ。產業は織物を第一とし、蠶絲の百三十七萬圓之に次ぐ、織物の內毛織物は實に三百七十萬圓に達し、絹織物も亦百二十萬圓を產す。

中島郡

稲澤町

東海道線　稲澤驛
名岐線　國府宮驛

人口一萬四千を有する部内の名邑で、東海道線と名岐鐵道の兩線に挾まれ、交通極めて便利である。産業は毛織物の六十餘萬圓、蠶絲類の三十餘萬圓の他擧ぐべきものはないが、此の地方に於ける金融、物貨集散の中心をなし、市況頗る盛である。

大字松下に「國衙屋敷」と呼び古瓦の出土する所があつて、國府廳舍の址と傳へられてゐる。尾張國司のことは日本書紀天武天皇の條に、尾張國司小子部連鉤のことが見えてゐる。其の後多くの國司が任命せられたが、就中大江匡衡は最もれ優た國司で此の地に學館を創設して自ら教授となつた。今「尾張國學之址」の標識が建てられてある。

主なる官公署、學校、銀行、會社

稲澤警察署、町立稲澤高等女學校、愛知縣稲澤農學校、稲澤銀行、愛知貯蓄銀行、稲澤電燈株式會社、水谷毛織株式會社

縣社　尾張大國靈神社　（稲澤町大字國府宮）　名岐線　國府宮驛

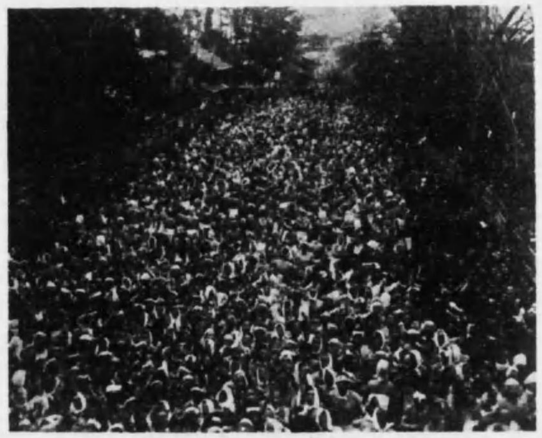
尾張の國靈大國靈命を奉齋する延喜式内の社で平安朝の頃尾張總社となり、寶曆二年官符を下して社殿を造營し、仁壽三年宮社に列せられた。

社叢は美しく社殿、拜殿、祭文殿、廻廊、樓門等いづれも神寂びた古雅な建築である。

舊曆正月十三日に行はれる直會祭は俗に儺追祭と稱し、人身供奉の遺風を止めた裸祭として全國屈指のものである。

むかしは往來の人を捕へて沐浴せしめ、之に淨衣を着せ儺負殿に入れ置いて一國の災厄を負はせ、當夜丑の刻神事の始まるを待つて之を引き出し、祠

官や長追の人々が白刄を振りかざし、草人形を投げ打ちながら追拂ふと云ふ亂暴な祭であつたが、寛保四年尾張藩から堅く禁止せられて以來、志願者の中から四十二歳厄年の屈强な男を選んで之に當らしめてゐる。選ばれた儺負人は祭日の一ヶ月前から修秡潔齋して、當日未明惠方に當る杜の中に遁れ、屈强な若者數名に護られ儺負人の中へはいつて往く。それと見るや、幾千の裸體は之に觸れて厄を拂はうと、近寄つて犇めく。此の揉み合ひ、押し合ふ樣は實に天下の奇觀である。



大國靈神社の裸祭

性海寺

（稻澤町大字大塚）　名岐線　奥田驛＝徒歩

眞言宗の寺で、弘法大師が熱田神宮參籠の砌創立したと謂はれる。その後建長年間領主長谷部源政が熱田大宮司家出身の良敏として協力して諸堂宇を建立し、良敏を以て中興開山とした。

愛染明王を祀つた俗に愛染堂と云はれる多寶塔は室町時代の優秀な建築で、今國寶に指定されてゐる。

妙興寺

（大和村）　名岐線　妙興寺驛

大應國師を開山とする臨濟宗妙心寺派の巨刹で、曾ては後光嚴天皇の勅願寺であつた。近世に至つて火災の爲め多少舊觀の失はれた憾みはあるが、依然として法燈隆昌で、室町時代の建造にかゝる勅使門を始め、大應國師の坐像、絹本着色の佛涅槃圖一幅、紙本着色の足利義教の畫像一幅は今國寶に指

定されてゐる。梵鐘には永和二年在銘のものと、享徳二年のものとがあり、其の他累代の綸旨、院宣、教書等數多の寺寶がある。

起　町

名岐線　起　驛

木曾川の東岸に沿ひ、人口一萬四千を有する縣内屈指の織物工業地である。此の地はもと東興と稱する寒村であつた。慶長十三年木曾川氾濫の時、海老屋村が河中に陷つたので其の村の住民は悉く此の地の堤防に移住した。然るにそれ等の住民は耕すに土地なく、農業を營むことが出來なかつたので諸國に出稼ぎ、やがて絹織る業を習ひ覺えてこの地に戻り、機業を始めて漸次盛になつたと謂はれてゐる。

現在織物の生産額は二千七百二十萬圓に達するが、就中毛織物最も盛で其の生産額は總生産額の八割を占めてゐる。

おこしの驛に宿りて
旅衣きその川へにやどりしてすゝしき瀬々の月を見るかな

主なる學校、會社

愛知縣起工業學校、艶金興業株式會社、蘇東興業株式會社、木九織物合名會社

尾張國分寺阯

（明治村大字矢合）

東海道線　稻澤驛＝乘合自動車

いま國分寺と稱する寺が存在して寺寶に國寶もあるが、往時の尾張國分寺阯は其の南方の畑中に殘り標識が建てられてある。附近から古瓦の出土を見るが全體の遺構は窺ひ得られない。

隣接の大字法花寺の地方に同國分尼寺があつたといはれてゐるが、今その遺趾として見るべきものなく僅かに此の地にある法華寺といふ寺にその名殘を止めてゐる。

海部郡

津島町

名岐線　津島驛

人口一萬九千を有する郡内の首邑で、尾西地方に於ける商工業の中心をなし、六十八の會社と六十の工場を包有してゐる。産業は織物を主とするが、毛織物殊に盛で其の産額一千二百萬圓に達し織物の大部を占めてゐる。

また蓮根は此の地の特産物として知られ、年産額六萬二千貫に上る。

主なる官公署、學校、會社、工場

津島税務署、津島警察署、愛知縣毛織物檢査所津島支所、愛知縣津島中學校、愛知縣津島高等女學校、東洋紡績株式會社津島工場、株式會社富永商店、合名會社遠山商店、片岡毛織株式會社、艶金興業株式會社津島工場、津島染色整理株式會社、合名會社伊藤長七商店

津島神社　檜門の左方に見ゆるは本殿の屋根

國幣　小社津島神社（津島町）

名岐線　津島驛

祭神は素盞嗚尊である。牛頭天王の日本總社といはれ、南北朝の頃、後龜山天皇の勅命によつて大橋三河守定省が社殿を造進したと傳へられてゐる。

織田信長は社殿を造營し、神領を寄せ或は祭式を復興するなど種々尊崇の誠を効した。天正年間の建立にかゝる丹塗の本殿は今國寶に指定されてゐる。

徳川時代には歴代藩主の崇敬厚く、一千二百石の神領があつた。鬱蒼たる

社叢には本殿以下莊嚴なる殿宇が並び建ち、境内は頗る森嚴である。

社寶の銘眞守の太刀一口と銘長光の劍一口は今國寶に指定されてゐる。

舊曆六月十四日の宵から十五日の朝にかけて行はれる船祭は、古來特色ある祭典の一つとして著名で四百に餘る提灯を萬燈の如く點じたる五艘の祭船が松原をかすめて漕ぎくる光景はまさに一幅の繪畫である。

七寶燒開祖　梶常吉墓

（七寶村大字遠嶋）　名岐線　七寶驛

常吉は尾張藩士梶市右衛門の次子で、文政年中服部村に住して鑛金を業とした。古書を繙いて偶々七寶の語があつたので、一讀志を立て和蘭製の七寶皿を打ち碎いて製法の研究に沒頭し、遂に精巧なる七寶燒に成功したのである。而して製法を林庄五郎に傳へ、更に同村内の人々にも傳へて克く今日の隆盛を見るに至つた。

常吉は明治十六年九月八十一歳を以て病沒し、此處に葬られたのである。

甚目寺

（甚目寺町）　名岐線　甚目寺驛

新義眞言の智山派で、いま大須寶生院の末寺である。推古天皇五年に甚目龍麿が漁獵の砌り海中から紫金の聖觀音像を得、一宇を建立して之を安置しその姓に依つて甚目寺と稱したと謂ひ、また天智天皇御不豫の時當觀音に祈願して靈驗があつたので勅願寺とせられたと傳へられてゐる。爾來庶民の信仰厚くやがて一大伽藍を營むに至つたが、其の後屢々火災や地震に遭つて荒廢し、建久七年に一度再興せられ、天正十七年に大修覆が行はれた。然るに最近明治六年の火災と二十四年の濃尾地震に遭つて大いに舊觀を損したが、建久元年建立にかゝる仁王門はよく災異を免れて今國寶に指定されてゐる。

寺寶には紙本著色の不動尊像と兆殿司作と謂はれる絹本着色佛涅槃圖の國寶の他古文書等がある。

方領大根

（甚目寺町大字方領）

甚目寺町大字方領を原産地とし、宮重大根と並び稱せられてゐる。周圍一尺以上目方三貫目に達するものがあつて、各地で宮重大根と共に食膳に珍重せられてゐる。作付反別三百町歩、生産額十萬餘圓に達してゐる。

彌富町

關西線　彌富驛
名岐線　彌富驛

人口六千の小都邑であるが、近年彌富金魚の名によつて著はれてゐる。この地の金魚養殖は明治初年以來のことであるが、爾來年と共に隆盛に赴き、現在に於ては奈良縣郡山と伯仲し、我國に於ける金魚の生産地として名聲を馳せてゐる。種類は和金、琉金を主とし年産百萬尾に達し、内地はもとより遠く米國、濠洲方面まで輸出されてゐる。

昭和毛絲彌富工場全景

また工場に昭和毛絲彌富工場がある。本工場は十二萬坪の敷地と二千餘名の職工とミユール、リング六萬五千錘を有し、年額五百萬封度の各種梳毛絲を生産する縣内屈指のものである。

佐屋渡

（佐屋村）

名岐線　佐屋驛

佐屋驛は東海道五十三次の外であるが此の地を經て伊勢桑名に渡るのを佐屋廻りと稱し、維新前には尾張藩の代官所も置かれて頗る殷賑を極めたものである。

明治元年の御東幸と、同十二月の御還幸と、翌二年の御遷都との際明治天皇は此の街道によらせられ、佐屋渡を渡

御、脇本陣に於いて御晝餐御駐泊あらせられたが、今其の建物はなく、また桑名への三里の航路も明治三十二年佐屋川の廢川によつて廢せられ舊時の盛觀を見ることが出來ない。

附近に水鶏塚がある。

水鶏鳴くと人の云へはや佐屋泊り　　芭蕉

知多郡

半田町

武豐縄　半田驛
知多線　知多半田驛

人口一萬八千を有する郡内の首邑で商工業の中心地となし、市況は頗る活潑である。衣ヶ浦に臨む半田港は武豐港の艀港であるが、港頭常に帆檣林立し八百萬圓の移出入が行はれてゐる。工業の主なるものは綿糸七百萬圓、綿布五百萬圓、ビール二百萬圓、製麥粉一百萬圓、醬油及溜四十一萬圓、清酢三十三萬圓、味噌三十二萬圓、清酒十八萬圓等で合せて一千六百萬圓となる。

主なる官公署、學校、銀行、會社、工場

半田税務署、半田警察署、愛知縣半田中學校、愛知縣半田農學校、愛知縣半田商業學校、株式會社中埜銀行、株式會社中埜酒店、株式會社中埜酢店、株式會社龜甲富中埜醬油店、東洋紡績株式會社知多工場、株式會社殿島屋製粉所、中埜産業

半田町大本營と御野立所

大本營は明治二十三年三月縣下に陸海軍聯合大演習の行はれた際、半田町字北條小栗富次郎方に設けられたもので、同月三十日御泊輦あらせられた。

舊館主要建物は昭和五年雁宿公園内に移築されたが、阯地は今中埜産業合名會社敷地内に其のまゝ保存せられ、孰れも今史蹟に指定されてゐる。

御野立所は同三月三十一日畏くも雨中に立たせられて御觀戰遊ばされたところで衣ケ浦を雙眸に收める景勝の丘上にある。

大正二年町は附近の地を買收し、御駐蹕記念碑を建て、雁宿公園となしたものである。

縣社 神前神社 （亀崎町） 武豊線 亀崎驛

神武天皇の御遺蹟として、往古安曇氏が神倭磐余彦尊を奉祀したと傳へる社である。境内は古松多く月見の地として三月十五日の潮祭と共に古來有名で、境内には月見亭が設けられてゐる。

大正の悠紀殿御屏風の四季の一景は此の境内を野口小蘋の筆に依つて描かれたもので、其の歌は

萬代もかはらぬかけをかめ崎のなみにうかへて月てりにけり

有松絞 （有松町） 愛電線 有松裏驛

有松町は人口二千五百の小都邑に過ぎないが、古來有松絞の名に依つて著名である。

有松絞は慶長年中武田庄九郎の創始したるもので、時代の好尚に適し藩主の保護をうけて逐年發達し、殊に元祿の華奢な世を迎へては奇拔な模樣染なご考案せられて一段の精巧を加へた。其の後天明年間の火災に全村焦土と化

して事業は一時廢滅の觀を呈したが、藩の保護と斯業者の努力に依つて寛政享和の頃には舊時を凌ぐ盛況を見るに至つた。然るに維新後は藩の保護を離れて獨古權を失ひ漸次衰色を呈したので、鈴木金藏、武田林三郎等奮起して意匠の考案、品質の改良、販路の擴張に專ら努めた結果、漸次舊觀を脱する隆盛を示したが、近時稍綿糸業に壓される觀のがある。

有松絞り作業狀況

昔より千代の契りや有松の千しほ八千しほくゝりそめけん　秀鷹

岡田町

愛電線　古見驛‖乘合自動車

人口僅かに四千の都邑であるが、織布工場二十六、晒工場四を有し知多木綿の主要生産地として最も著名である。織物の主なるものは本晒、岡木綿、捺染、生白、天竺細布等で其の生産額は二千餘萬圓に達し多く海外へ輸出されてゐる。

新舞子海水浴場

大野及新舞子海水浴場

（大野町・旭村）　愛電線　新舞子驛　大野驛

所謂青松白砂の海岸で、紺青の波上遙か紫靄に烟る鈴鹿の連峰を望み其の風光は頗る佳絶である。波は靜かで遠淺をなし絶好の海水浴場として都人士の人氣を集めてゐる。

常滑燒（常滑町）

愛電線　常滑驛

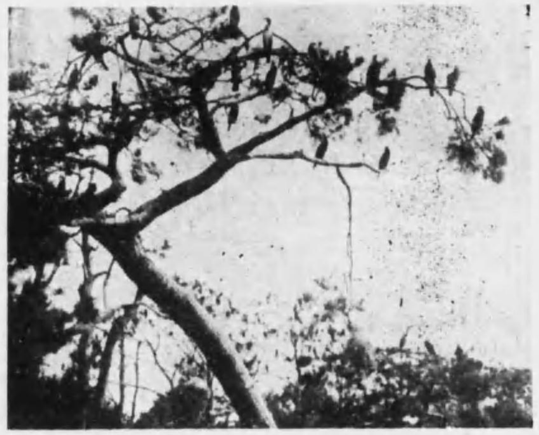
常滑燒は常滑町を中心に、北は鬼崎村南は西浦町附近より產出する陶業品の總稱で、その起源は遠く天武天皇の御宇僧行基の創製にかゝると謂はれ、また安貞年間には加藤春慶が此の地に窯を開いたとも傳へられてゐる。其の後常滑總心寺の住持青利なる者が鐵砲窯を發明した。現在古窯と稱するものである。文化年間鯉江方救が新窯の案出を企圖したものゝ成功せず、其の子方壽は其の遺業を繼ぎ天保五年遂に眞燒窯を創造した。現

輸出向陶磁器製造狀況

在の登窯は之に多少の改良を加へたものである。爾來製陶業は著しく進展し明治五年には鯉江高司が土管を創製した。適々各所に鐵道布設工事が起つたので時宜に叶ひ其の需要は逐年增加し、陶業は倍々隆盛となつた。同三十三年常滑陶器組合の事業として歐洲式石炭窯築造せられ、同二十八年には伊奈初之亟が石炭窯と眞燒窯を折衷する新窯を築いて燃料の節約に成功し、越えて大正二年澤田四郎兵衛が小規模の鼈窯を築いて、從來の大窯、眞燒窯の如き共同使用の不便を除くなど、種々な改良が加へられて今日に至つた。現在に於ける製品の主なるものは陶器、陶管、瓶、甕、火鉢、タイル、テラカッタ等であるが、其の內陶器、陶管の生產額のみでも五百五十萬圓に達してゐる。

常滑町の主なる學校、會社

愛知縣常滑陶器學校、伊奈製陶株式會社



鵜ノ山に於ける鵜の棲息狀態

鵜ノ山の鵜蕃殖地（小鈴谷村大字上野間）

知多線　河和口驛⇄乘合自動車

天保初年以來の鵜の生息地である。季節によつて其の數に增減はあるが、最も多きときは三千羽を超え、少なきときでも一千羽を下らぬといふ。これ等の鵜は二町歩の松樹林を塒として、西浦及東浦の海に、又風波の荒い時は近接の池に餌を求め、毎年二千羽に餘る雛が蕃殖し、いま天然記念物に指定されてゐる。

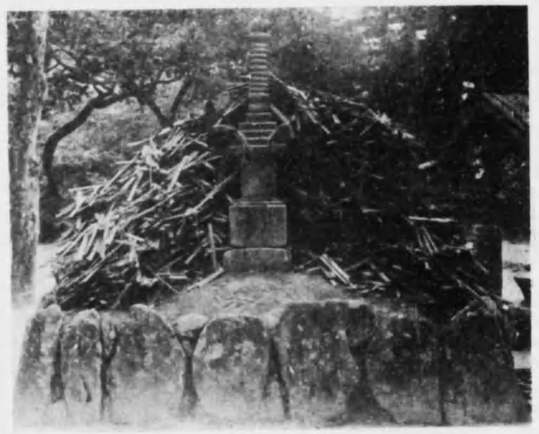
大御堂寺（野間村）

武豐線　武豐驛⇄乘合自動車

俗に大坊と稱せられる眞言宗の寺で、天武天皇の御代の創建にかゝり、白河天皇の承暦年中に勅願寺となつて大御堂寺と命名されたと傳へられてゐる。惟ふに大御堂寺は一山の總稱で、當時大坊が別當職として一山を支配してゐたところから今日大坊と通稱されるのである。吾妻鏡に依れば平治の亂に長田忠致に殺せられた源義朝の墳墓が荆棘の掩ふ所となつて人の訪ふものなきを悲しみ、平康頼が水田三十町を寄附し小堂を建立して、その冥福を祈つた。次いで源頼朝は平家を滅ぼすに及び、文治六年亡父の墓に詣ふで、菩提の爲めに大法要を營んで七堂伽藍を建立し、逆臣長田父子を墓前に誅して父の靈を慰めたといふ。その後享祿四年兵火に罹り大御堂、樓門等を殘す外悉く烏有に歸し、天文三年再修されたが、慶長五年再び兵燹にかゝり、藩祖義直の時に至つて大修理が加へられた。

寺寶の内最も有名なのは此の寺の由緒を物語る義朝最期之圖二幅である。之は元和年中義直が狩野探幽に命じて畫かしめ、自ら其の繪解を書いて寄せ

たものであるといふ。



源義朝の墓　推高く積まれたるは奉納の木太刀

境内に源義朝、鎌田政清夫妻、織田信孝等の墓があり、附近には義朝及び長田父子關係の史蹟がある。

内海町と其の附近

知多線　河和口驛＝乘合自動車

内海町は六千の人口を有する南知多の名邑で、夏季は海水浴に、キャンプに賑ひ、附近には愉快なサンドスキー場や礫浦の勝地がある。

礫浦は翠松茂る伊勢山を負ひ、遙か伊勢の連峰、菅島、神島、伊良湖岬を雲煙の間に眺める景勝の地で、天照大神

が戯れに此の地に投げさせ給ふたとの傳説をもつ百餘個の礫石が二百數十米に亘つて點在してゐる。知多半島は第三紀新層の水成岩であつて礫石の如き片麻岩を產するのは極めて珍らしいことである。之は半島地層の基底をなす花崗岩や片麻岩が風化して生じた礫を第三紀時代に粘土を以て膠結し、此の礫を含む頁岩を生じたものであらう。

礫浦の礫岩

礫浦の西に眞白な微粒の硅砂から成る標高六十五米の砂丘がある。近年サンドスキー場として知られるもので、緩急さまゞのスロープ、變化あるレースコースがあり、四季を通じてスキーの快味を享樂することが出來る。之は頁岩、

砂岩層の上に海岸から白砂を吹きつけて砂丘を造つたものである。

豊濱港

（豊濱町）知多線　河和口驛＝乘合自動車

彎狀をなす須佐灣内の良港で、伊勢海に於ける唯一の避難港をなし、また寶飯郡三谷港、渥美郡福江港と共に縣下三大漁港と云はれる。

此の地の漁業は凡そ百年前、師崎の海上奉行千賀志摩守が伊豆より打瀬網を習得して此の地に試みて以來著しく發達したもので、此の打瀬船の歸帆する樣は實に壯觀である。水産物の多くは陸送或は海運によつて名古屋に送られる。附近には養漁池の設備もある。

郷社　羽豆神社と羽豆城阯

（師崎町）知多線　河和驛＝乘合自動車

建稲種命を祀る延喜式内社で、社傳に依れば白鳳年中の鎭座である。社地は半島の最南端に突出して三面海に臨んでゐる。

師崎港より見たる羽豆神社々叢

社叢は、樹木に觸るれば神罰を被るといふ傳説もあつて嘗て斧鉞の加へられたことなく、全山「うばめがし」よく繁茂し、それが潮風を受けて姿態面白く、さながら樹のトンネルを見る奇觀である。その間「いぶき」の自生するものがあり、又暖地性海岸植物も生育して、附近の山相とは全く趣を異にし、いま天然紀念物に指定されてゐる。

また南北朝の頃、熱田大宮司千秋季氏が此の地に羽豆城を築いて王事に勤め南朝方の策源地として活動したことは著名であるが、其の遺阯は明らかでない。今境内に羽豆城阯の碑が建てられてある。

神のます羽豆のみさきの磯邊には涙のしらゆふかけぬ日そなき　成昌

篠島（篠島村）

知多線河和口驛＝乘合自動車＝渡船

篠島より北方の屬島を望む　手前より小磯・中手・築見の諸島

伊勢海と衣ケ浦の中間、師崎の海上四粁のところに在る。周回一里、人口二千五百の小島であるが、古くから史蹟と風光の美によつて著名である。此の島は初め伊勢國に屬し神宮の所領であつたが、後ち尾張國に屬した。

往時は海上の驛路として繁盛し、平安朝の頃從五位上篠島王居住して地方政治が行はれ、當時坂上田村麿が來つて築城を謀議したがその擧には及ばなかつたと傳へられてゐる。南北朝の頃、後村上天皇が未だ親王でお在しませし延元三年九月伊勢の大湊から出帆せられて東國に向はせらるゝ途上難船し、親王の御船は此の島に漂着して北畠顯信と共に御上陸になつたので、島民は非常に驚き俄かに篠島古城阯を修營潔淨して王宮に充てた。遺蹟は今東山の丘上に在つて篠島聖蹟の標柱が建てられてゐる。また親王が命じて穿たしめられたと傳へる井戸は四方切石を以て圍み、傍に帝井碑がある。篆額は有栖川熾仁親王の御筆である。尙ほ他に石器時代、古墳時代の遺蹟や淸正の枕石、室町末期の靑石塔婆等がある。

この島をめぐり木島、築見島、中手島、小磯島、野島、廣龜、日間賀島など碧瑠璃の盤上に浮び、その間に往き交ふ眞帆片帆が一段と風光の美を添へる。海水浴に好適なるところから夏季名古屋地方から出遊する者が多い。

武豐町

武豐線　武豐驛

人口七千を有し、市街は南北に長く、製材、火藥製造、土管製造等各種の

工場多く、大小の煙突林立して他の都邑と異る雰圍氣が漂つてゐる。産業は工業、釀造業、水産業等の順位で、其の生産總額二百萬圓を超えてゐる。

この港は名古屋港と共に本縣に於ける重要な開港場で、港内水深く五千噸級の巨船が自由に出入し得る天然の良港である。最近に於ける出入貨物の主なるものは穀物、石炭、木材、爆發物、礦油、肥料等で、其の總價額は一千七百萬圓に近く、また出入の船舶數二千八百餘隻、其の噸數三十三萬八百餘噸に達してゐる。

武豐港　突堤より望む

主なる會社、工場

吉中醬油株式會社、帝國火薬工業株式會社武豐製造所

長尾山の聖蹟

（武豐町大字迎戸）　知多線　知多武豐驛

長尾山は武豐驛の西約五百米の地點、標高三十二米の岡丘で、風光明媚を誇る衣ケ浦を一眸に收むる勝地である。

聖蹟は陵腹に在る鳳翔閣と頂上の御野立所とで、鳳翔閣は二階建間口七間半、奥行五間半の一棟であつて明治二十年二月二十三日畏くも明治天皇が御晝餐を聞し召され、御少憩の後ち山頂に玉歩を枉げさせられて陸海軍對抗演習を叡覽あらせられた所である。また當時皇太子にあらせられた大正天皇には同二十四年八月二十二日伊勢の二見港より還御の際と三十四年六月八日近海御順航の際と、再度此の地に行啓あらせられ、鳳翔閣にて午餐を召されるなど、屢々光榮に浴した聖蹟で、今史蹟に指定されてゐる。

御心にかなひますらん長尾山はるの霞のかゝる景色は　　枚皇后宮太夫

碧海郡

安城町

東海道線　安城驛
碧海線　南安城驛

もと此の地は水利なき不毛の瘠地で農耕に適せぬ一寒村に過ぎなかつたが明治十八年明治用水が完成して以來農業方面に於いて各種の施設が行はれると共に交通の利便も得て急激な發展を遂げ、僅か半世紀の間に人口二萬二千を算するに至つて一躍郡内の首邑となつた。主要農産物たる米、麥、果菜の年産額は二百五拾萬圓に達し、副業とする養鷄の收益は三十餘萬圓を超えてゐる。

尙ほ此の地の農業施設が恰の北歐の丁抹に相似するといふので、各地から毎年二萬餘人の視察者が吸引されてゐる。

主なる官公署、學校、銀行、會社

安城警察署、愛知縣農事試驗場、蠶業取締所安城支所、愛知縣安城農林學校、愛知縣實業教員養成所、愛知縣安城高等女學校、安城女子專門學校、安城女子職業學校、株式會社碧海銀行、株式會社碧海貯蓄銀行、愛知乾繭倉庫株式會社、帝國製絲株式會社

安城の農業と農會

日本デンマークの名によつて曹く天下に紹介される安城に於ける、農耕法の改良、生産品の販賣、農産物の加工、事業の共同經營等其の施設の見るべきものが甚だ多い。これが斡旋助長の大使命を負ふて中心となり活動しつゝあるものは安城町農會である。

同町には明治二十二年勸農會の組織されて農會經營の端緒が開かれ、爾來農家の合理的經營につき苦心をかさねて來たが、最近産業組合との提携、即ち生産機關としての農會經濟機關としての産業組合が、運用提携することに

よつて一層農民の自覺と事業の進展を見ると至り、個人及一部に於て容易に爲し得ざる調査研究を進め、現在の施設、將來の劃策を講じつゝある狀態で、一、組織的なるべき事、二、合理的なるべき事、三、共同的なるべき事、四、自助的なるべき事の四大綱領に則り、米作を中心に鷄卵、西瓜、梨、トマト、大根等の販賣統制を計り、更に農産品加工事業をも創め、所謂多角形農業の經營につとめてゐる。

農耕の狀況

農會は又青年教育機關たる農堂館を創設し、一方町内に在る各種の學校とも聯絡を保ち、農家の青少年子弟の農業趣味の養成から勞作教育へと歩を進め、

佛教會と協力し寺院を利用して農繁托兒所の經營をなし、更に農業圖書館をも建設して一般町民の向上に資してゐる。

現在會員四千一百五十名を有し、會長副會長評議員の外、常務幹事二名、書記二名、技術員二名、指導員十二名を置き一ヶ年一萬八千餘圓の經費を以て活動してゐる。

農會隷屬の組合次の如し。

農事改良實行組合、園藝組合聯合會、園藝組合、花卉組合、養豚組合、養蜂組合、養蠶實行組合

産業組合は十三個所にあつて何れも成績の見る可きものがあると共に聯絡提携し互に障壁を撤して協力一致克く農業者の爲めに努力し、農業者もまた各自の機關として活動の中心點をなしてゐる。

明治用水

本郡は北に山を負ひ、南は海に面してゐるが、その中間の平野は多く高地をなして水利悪く乾燥甚だしきため、農民の困苦は實に名狀し難いものであつた

明治用水々源地大堰堤　所在地　西加茂郡擧母町大字今

文化の頃、明治村の都築彌厚といふ篤志家が西加茂郡猿投村大字越戸から矢作川の水を分派する計畫を建て、幕府に申請し、天保三年許を得て直ちに工事に着手したが、翌年病に倒れてその計畫は中止せられた。つゞいて萬延、文久の頃、岡崎藩は尾張藩の威力を假りて工事を落成せんとしたが之も失敗に終つた。明治になつてから明治村の農岡本兵松、伊與田與八郎が彌厚の計畫を踏襲して之を遂行せんと企て、明治十二年工事に着手し、西加茂郡擧母町大字今に取入口を設け、十四年四月現在の明治川神社の邊りまで竣成した。而して十七年六月全部の完成を見たのである。幹線は高濱に至る本線と刈谷に至る西線と米津に至る東線の三線であるが、その他の支渠を合すれば延長四十餘里に達し、往年の不良土は概ね美田と化して、灌漑面積は現在一萬町歩に垂んとしてゐる。

明治十八年關係町村の農民は安城町大字今に明治川神社を創立し、高靈產神並水分神を祭神として都築彌厚を始め明治用水開鑿の功勞者を合祀し、同四十二年鄕社に昇格した。

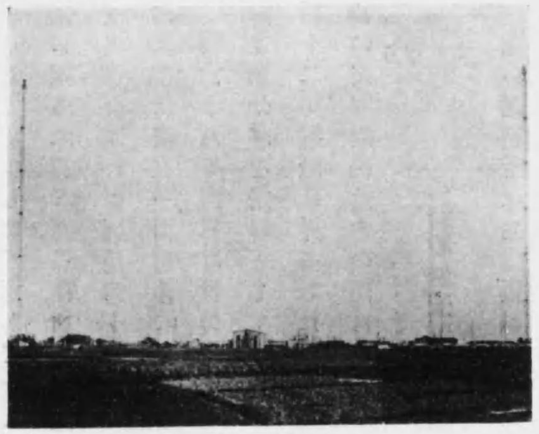
傍の東海道松並木の間には彌厚の偉功を不朽に傳へんとする記念碑がある。

（依佐美村）　三河線　小垣江驛

對歐無線電信送信所

此の送信所は三重縣四日市受信所と相呼應して歐洲の大無線電信局と直通無線通信を行ふ本邦唯一のものである。送信所内には七百キロワット高周波

發電機式長波長送信裝置一組と四十キロワット短波長送信裝置四組の設備があつて、名古屋無線電信局内通信室の電氣裝置による操作運用により一秒時三十萬粁の速度で百五十米の鐵塔から歐洲方面へ電波が送りだされるのであるが、二列八基の大鐵塔は高さに於いて東洋一を誇るものである。



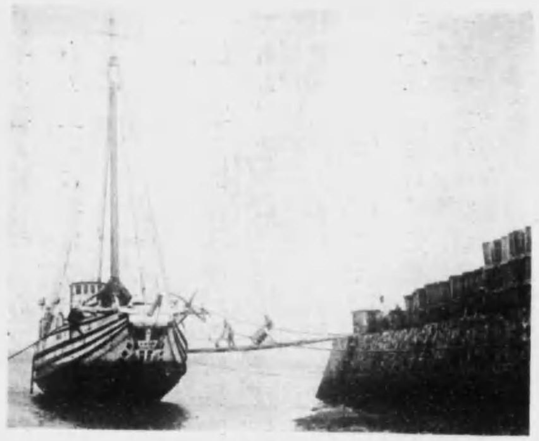
對歐無線電信依佐美送信所

高濱町附近の陶業

三河線　高濱驛

高濱町始め新川町及び大濱町に於ける陶業の隆盛は近世のことであるが、製瓦は比較的古いことで餘業として焜爐、土鍋等も製出されてゐた。明治維新後に至りこれ等製品は需要の範圍を遽かに擴めて逐年産額を增加し、現在は屋根用白瓦、土管など最も盛に製出せられ、生産額は二百六十五萬圓に上つてゐる。

尙ほ新川町の銅燒は一見古銅器と紛ふほど精巧なものである。



高濱に於けるる土管積出狀況

北野廢寺阯（矢作町大字北野）

愛電線　矢作驛＝自動車

南を正面とする方二町餘の境域の周圍には僅かに土壘が殘つてゐる。正面の中央に在る門阯の北には巨大な塔心礎及び金堂の土壇が殘り、更にその北には數個の礎石が散在して講堂阯の名殘を留めてゐる。

是等の主要建物が、南北一直線上に配置されたことは、大阪の四天王寺式の

飛鳥時代の建て方で餘り類例を見ないものである。尙ほ寺阯から珍らしい磚佛や土塔が發見せられ、奈良朝の頃巨大な寺院が在つたことが偲ばれる。

いま史蹟に指定されてゐる。

縣社　知立神社　（知立町大字知立）　愛電線　知立驛

鵠鷸草不蒼合尊を祀る延喜式内社で、蝮除けの神符の出る御社として有名である。社傳に從へば仲哀天皇元年の創建で、古來廣大な社地に社殿が營まれ又神宮寺もあつて三河に於ける大社であつたが、天文十六年戸田直光の兵燹と元龜元年の火災に遭つて一時は甚だしく衰頽した。後ち刈谷城主水野信元之を再建し、元和二年には水野忠清が之を修覆して今に至つてゐる。永正六年建立の多寶塔は幾度かの災厄を免れいま國寶に指定されてゐる。

八橋　（知立町大字八橋）　三河線　八橋驛

この地は往昔官道に當つて野路の宿と稱し、北を流れる逢妻川は幾筋かの細流であつたといふ。

仁明天皇の朝、一人の寡婦が此の川の邊りに來て、海苔を採らんと對岸に渉つた。後に殘された二兒は母を慕ひ誤つて溺死したので、母は悲嘆の餘り尼となり、衆人の通行の利便と愛兒供養のために此處に八つの橋を架した。之から地名も八橋と謂はれたと傳へてゐる。

伊勢物語に

『その澤に燕子花（カキツバタ）いと面白く咲きたり、それを見てある人の曰く「かきつばたといふ五文字を句の上にすゑて旅の心を讀め」と所望されて

からころもきつゝ馴れにしつましあれば
はるばるきぬるたびをしぞ思ふ』

とあることからかきつばたの名所ともなつた。

其の後官道が變り、宿驛が知立に移つて後も、八橋の故事と共に杜若は著

名であつて、永く詩歌や繪畫の題材として人口に膾炙せられた。今無量壽寺境内の園池にその名殘といはれる杜若がある。

さゝかにの蜘手あやふき八はしをゆふぐれかけてわたりぬるかな　阿佛尼

刈谷町

東海道線　刈谷驛
三河線　刈谷町驛

東海道線と三河鐵道の交叉する地點を占め近年工業都市として注目されてゐる。人口一萬五千を有し、産業は綿絲、綿織物、自動織機、紡織等を主とし生産總額一千三百萬圓を超えてゐる。

主なる學校、會社、工場

愛知縣刈谷中學校、愛知縣刈谷高等女學校、中央紡織株式會社、豐田紡織株式會社刈谷工場、株式會社豐田自動織機製作所

刈谷城趾

（刈谷町大字刈谷）　三河線　刈谷町驛

刈谷城はまた龜城とも云はれ、天文二年水野忠政が知多郡緒川城から移住して初めて築城に着手し、その子信元に至つて竣成したものである。桶狹間の戰後信元の弟信近が此の城を守つて織田氏に通じたため駿河勢に攻められて戰死したが、兄信元は再び之を奪ひ還した。然るに織田信長は佐久間信盛の讒を信じて天正三年德川家康に命じて信元を殺さしめた。それより此の城は信盛の領するところとなつたが、天正八年に信元の季弟忠重に附與された忠重の歿後は嫡子勝成、次子忠清、相次いで相續したが、軈て忠清吉田に轉封の後ちは松平、稻垣、阿部、本田、三浦等の諸氏相代つて之を領し、延享四年に至り土井利德が西尾城から移つて二萬三千石を食み、世々相次いで維新に及び、明治四年廢墟となつた。

幡豆郡

西尾町

愛電線　西尾驛
碧海線　西尾驛

舊時の城下を中心に發達した町で、現在一萬八千の人口を擁する郡内の名邑である。近時交通機關の整備と共に商工業著しく發達した爲め、貨物の集散常に夥しく市況頗る盛である。工業は織物を第一とし其の産額は三百四拾萬圓を超えてゐる。特産物としては西尾茶と西尾燒がある。茶の栽培は古く元祿時代から行はれて、精製品は宇治、靜岡に拮抗すると謂はれ、西尾燒は素朴淡雅なものである。

主なる官公署、學校、圖書館

西尾警察署、蠶業取締所西尾支所、愛知縣西尾中學校、愛知縣西尾蠶絲學校、愛知縣西尾高等女學校、岩瀬文庫

西尾城阯

（西尾町）

鎌倉幕府の時、吉良の祖先足利義氏が此の地に來り、城を創築して城下を西城と稱した。爾來子孫相繼いで十四代吉良氏の居城となつたが、永祿四年德川家康之を滅ぼし、天正六年に至り西尾と改稱した。同十八年岡崎城主田中吉政之を兼有し、慶長以後は本多、松平等數氏を經、明和元年松平乘祐が出羽山形から移つて六萬石を領し、世襲して維新に至つた。

城阯には御劍八幡宮鎭座し、一部は今公園になつてゐる。

三河線　一色驛

一色町と大提灯祭

一色町は人口一萬八千をする小都邑でこの地方の物貨の集散地である、漁業盛で魚獲高百萬圓を超え、蠶糸、鹽の産額も亦少なくない。

港は海岸より二粁の地點にある。市子川の入江を利用するため船舶の碇泊には極めて安全で木材、石炭、石材などの移入が行はれてゐる。

毎年八月廿六、七の兩日郷社諏訪神社で行はれる大提灯祭はもと海魔除けの大篝火から起つたと謂はれ、當日町内六つの各組から二張宛の彩色せる大提灯が献燈されるのであるが、各組は常に提灯の大を競ひ、遂に今に見る直徑三間半、長き五間半の大提灯となつた。日没と共に御神燈の淨火は大蠟燭にうつされ、

諏訪神社の大提灯

それが擔がれて提灯に入るので頗る壯觀を呈し、各組子は神前に夜を徹して之を守る。夏の夜祭として屈指のものである。

村社　天竺一社

（福地村大字天竺）愛電線　一色口驛＝徒歩

此の地は今矢作古川の堤の下にあるが、往古は海濱であつたと傳へられてゐる。

延暦十八年七月、布を以て背を掩ひ、犢鼻褌を締めて裝束樣の布を左の肩にかけ、年齢二十計りで身長五尺五寸、耳の長さ三寸餘の何國の者とも判らぬ一人の男が小船に乘つて此の地に漂着し、自ら天竺人と稱して常に一弦琴を彈じて哀れな聲で歌つてゐた。その荷物の中から綿の種子を發見して之を植栽したのが我が國に於ける棉栽培の最初であると謂はれてゐる。棉の栽培は漸次三河一帶に繁衍し、やがて三河木線の起原をなしたといふ。

後世里人がこれを新波陀の神として社を建て天竺社と稱した。新波陀とは

太秦氏が絹織の功に依つて波陀公と稱せられたに對して云つたものである。

金蓮寺

（横須賀村）　愛電線　上横須賀驛

もと眞言宗であつたが、後ち曹洞宗に屬した。

文治年間の建立と傳へる三間四面の阿彌陀堂は所謂三河七御堂の一で、いま國寶に指定されてゐる。三河七御堂とは寶飯郡八幡村の財賀寺、同大塚村の丹野御堂、同蒲郡町の長泉寺、南設樂郡鳳來寺村の鳳來寺、豐橋市の赤岩寺、渥美郡二川町の普門寺と此の寺で、何れも賴朝の命を奉じて地頭安達藤九郎盛長が造營したと傳へられてゐる。

宮崎海水浴場と縣社幡頭神社

（吉田町大字宮崎）　三河線　宮崎口驛＝自動車

北に山を負ひ南に渥美灣を抱き、近く梶島、遠く佐久、日間賀の諸島を望み、海水清澄でその風景畫くが如く、汀の巨岩はまた人の登るに適してゐる古來鹽湯治場として知られて來たが、近時三河鐵道や愛知電鐵の開通によつて浴客頓に增加するに至つた。

附近の幡頭神社は海に面する山の中腹にあつて建稻種命を奉祀してゐる。三間社流造の本殿は室町時代の建築で今國寶に指定せられてゐる。

額田郡

龍山寺（常磐村大字瀧）愛電線　東岡崎驛ヨリ乘合自動車

朱鳥年間の創建と謂はれ、嘗ては山谿に亘る七堂伽藍を具へ多くの僧坊を有する天台宗の巨刹であつたが、今は仁王門、本堂其の他二三の堂宇を存するのみである。貞應元年の再建といはれる本堂藥師堂は五間四面の單層四注造の棧瓦葺の鎌倉時代に於ける優秀なる建築で、又文永四年の造營にかゝる仁王門は古來藏彈匠の建築と稱し、桁一本打ち違へて自害した大工の墓といはれるものも殘り、孰れも國寶に指定されてゐる。また境内の東照宮は將軍家光の建立にかゝる所謂權現造丹青塗の莊麗なもので、いまは獨立して鄕社常磐神社となつてゐる。

大樹寺（岩津町大字鴨田）三河線　大樹寺驛

淨土宗に屬してゐる。文明七年岩津城主松平親忠が菩提所として創建したもので開山は勢譽上人である。その後親忠の裔孫岡崎城主松平清康之を再興し、元文十九年勅願寺に準ぜられたといふ。寛永十八年に宏壯なる殿堂が營まれ、爾來屢々幕府から修繕をなしたのであるが、幕末に至つて、火災に罹り、現在の堂宇は概ねその後に於いて改築されたものである。

大樹寺の多寶塔

天文四年清康の建立と傳へる多寶塔は幸ひ燒失を免れて今國寶に指定されてゐる。舊時は寺領七百石を有し、寺域内には親忠以下清康に至る八代の墳墓がある。寺寶には德川關

係の古文書の他貴重なるものが尠なくない。

信光明寺　（岩津町大字岩津）　三河線　岩津驛

淨土宗に屬し、維新前には百二十石の寺領を有した。文明十年の建立にかゝる三間三面の入母屋造茅葺の觀音堂は今國寶に指定されてゐる。

寺内には德川氏の祖岩津城主松平信光の墓があり、高月院、大樹寺と共に松平氏の菩提所として由緒深い寺である。

眞福寺　（岩津町大字眞福寺）　三河線　岩津驛＝自動車

聖德太子の創建で天台宗に屬し、三河國に於ける最初の佛寺と稱してゐる。本尊は藥師如來で、本堂には推古天皇の御宇本尊の出現したまひしといふ靈泉がある。舊時三百石の寺領を有した古刹で今尙ほ伽藍は整備してゐる。堂前には永祿元年在銘の鰐口が懸けられ、寺寶には古い時代の本尊といはれる塑造の佛頭等がある。

西加茂郡

擧母町　三河線　擧母驛・上擧母驛・省營バス

内藤氏の舊城下である。矢作川の西岸に沿ひ人口一萬四千を有する郡中の名邑で、近年交通の發達と共に工業は漸次發展の傾向を示しつゝあるが、依然蠶業と養鷄業が主でその生產總額は二百七十萬圓に上つてゐる。西郊の砂山から搬出される浮石砂はガラスの原料或は磨砂として廣く使用せられ年產額六百六十萬貫に達してゐる。この地は往昔衣の里と稱し名勝の地であつたといひ、これに關する詩歌の殘されたものが多い。

千載集

立かへり猶見てゆかんさくらはな衣の里ににほふさかりは　具氏

夫木集

夜なかされ深山立出てほとゝきす衣の里にきつゝ啼なり　爲盛

主なる官公署、學校、會社

擧母警察署、營業取締所擧母支所、擧母土木工區事務所、愛知縣擧母高等女學校、西加茂製絲株式會社

擧母城

（擧母町）

等しく擧母城といふが時代に依つて位置を異にし、中條氏時代、慶長寛延時代、安永以後こ三回に亘つて城地の變更が行はれた。

最初の中條氏時代は大字金谷字外籔で延慶年間中條景長此の地に築き、その子秀長以下數代相續いで居城したが、後ち織田信長の有に屬し、永祿四年佐久間信盛の象有する處となつた。城阯は鐵道工事の爲めに舊態を失つたが尙ほ濠の形が殘つてゐる。

慶長九年三宅康貞此の地に封を受けて、大字擧母字舊城に居住し、後ち本多忠則を經て寛延二年内藤政苗が上州安中から移つて二萬石を領し其の舊地に築いて居城したが、安永五年その子學文が字龍子山に新城を築いて移つたので之より廢墟となつた。その城阯は櫓臺、石垣等現存して其の遺構が見えてゐる。尙ほ學文の築いた新城は政俟、政成、政優と相繼ぎ維新に至つて廢せられた。其の城阯には土壘や石垣が現存し。濠は水田となつてゐるが、よくその面影を留めてゐる。

長興寺

（擧母町大字長興寺）

建武二年領主中條秀長の創建と稱し、臨濟宗に屬してゐる。もと塔中十八院を有し輪奐の美を盡せる巨刹であつたが、永祿の兵亂に灰燼となつたので織田信長が其の臣余語正勝に命じて再建せしめたと謂ふ。

寺寶の内應永八年幹緣比丘義睦と記せる絹本着色の涅槃圖一幅は今國寶に指定せられ、余語久太郎筆織田信長の畫像は其の風貌を窺ふものとして廣く知られてゐる。

境内には中條秀長墓と稱する寶篋印塔がある。

縣社 猿投神社

（猿投村大字猿投）三河線 猿投驛＝乘合自動車

猿投神社　鳥居の中に見えるは大橋と大門

大碓命、景行天皇、垂仁天皇の三柱を祭神とする延喜式内社で、白鳳年間の創建と傳へる。

本社は字本城にあり、猿投山上の字茂吉に本宮、同字鷲取に西宮がある。明治維新前には神宮寺や多くの僧坊、護摩堂、三重塔等存したが、今は僅かに遺趾を見るのみである。擧母城主中條氏は最も當社を尊信して多くの神田を寄附し、豐臣秀吉も山林竹木伐採業止の朱印を出し、德川家康も亦慶長七年先規に依つて七百七十六石を寄進してゐる。

社寶の主なるものは嘉元二年の勅額を初め傳八幡太郎楯無鎧、太刀、古文書等で波平行安在銘の兵庫鎖太刀一振は今國寶に指定されてゐる。

猿投山と御陵墓

（猿投村大字猿投）

標高六百二十九米の西三河に於ける雄峯で山頂に大碓命御墓がある。大碓命は景行天皇の皇子で日本武尊の御兄に當らせられる。景行天皇五十二年此の山に登せら給ひ、不幸毒蛇に中つて薨去され此處に葬り奉つたと傳え、古くから御廟所と稱して垣が設けられてゐたのを明治八年御墓所と定められ、宮内省の所管となり今守部が置かれてゐる。

山中には東西の二流がある、東は猿投神社の附近を流れ、西は廣澤谷を流れて共に南下してゐるが、その溪流中の岩面に浮び出る球狀花崗岩には鮮明な菊花狀の斑紋が現れてゐる。俗に菊石と稱せられるもので、今天然紀念物に指定されてゐる。此の他樹陰に產する冬蟲夏草の一種で「かめむしたけ」

と稱する珍奇な植物等もある。

登山道は此の二流に沿ふた東西の二道であるが、西は東の急峻なるに反して坂路緩やかで路傍の變化に富んでゐる。

舞木廢寺塔阯

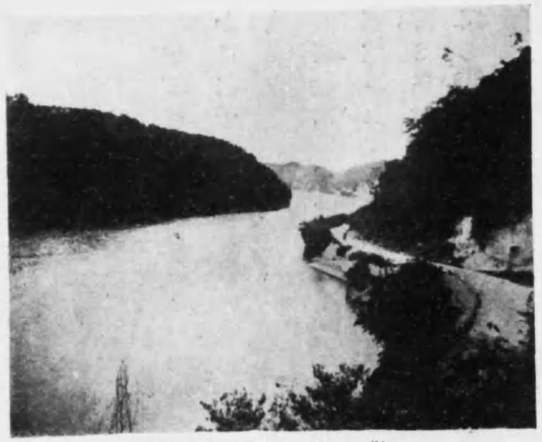
（猿投村大字舞木）

表面蛇目形に彫り込まれた直徑一・七六米の塔の心礎が在り、附近に多數の布目瓦が散亂してゐる。傳説も記錄も殘つてゐないが、山間部の僻遠の地にかゝる寺塔の遺蹟があるのは珍らしいことで、瓦の文樣、礎石の構造より見て尠くとも奈良朝に於いて相當大きな佛寺の營まれてゐたことが推知される。今史蹟に指定されてゐる。

勘八峽

（猿投村、石野村）　三河線　平戸橋驛

矢作川の上流平戸橋からもと枝下用水取入口の間を總稱して勘八峽といふ。以前は兩岸に屹立する巨岩に水勢激し左岸の鬱蒼たる御料林勘八山の翠松河水に映じて、其の風景の美を誇つたものであるが、十年前御料林は伐採せられ、又平戸橋の上流數町の處に三河水力發電所の堰堤が築かれて完全に河水を堰き止めたので、今は以前の風景とは全く趣を異にしてゐる。



勘八峽　ダムの上流を望む

堰堤の上流は一大長湖となり、兩岸の樹影がその豐潤な色彩を深潭におとして閑雅な風致をなしてゐるが、その下流はさながら井底を見るやうで、急勾配な溪谷の磊々たる巨石は往時の水勢を思はせるものがある。

東加茂郡

足助町

三河線　中金驛ノ乘合自動車

街は東西に長く足助川中央を流れて南方に巴川と合流してゐる。人口は僅かに三千を超ゆる都邑に過ぎないが、交通の要路を占め貨物の集散地として商況盛である。

鄕社八幡神社は白鳳二年の創建と傳へ、本殿は室町時代の建築で今國寶に指定されてゐる。飯盛山麓の香積寺は應永年間創立の禪刹で足助氏一族の靈牌と名僧風外和尙の碑がある。門前から町に至る巴川畔一帶は之を香嵐溪と稱し紅葉の名所として著はれてゐる。

錦金城還飯盛山　　風　外

江上逢霜落、冷風拂老顏、仍知紅葉待、扶杖好還山。

主なる官公署

足助警察署、鑛業取締所足助支所、足助木炭檢査所

足助城趾　（足助町）

眞弓山の山上に在つて今は雜木繁茂してゐるが、山頂の平坦地には眞弓山城墟香嵐溪の碑が建てられてゐる。此の城は足助重範の祖重長以來數代の居城であつたと謂ふ。重範は元弘元年八月その子重政と共に笠置山に馳せ參じて奮戰した南朝の忠臣で、明治二十四年正四位を贈られ昭和八年更に從三位を贈られた。今鄕社八幡神社の東に足助神社として奉祀せられて

ゐる。

附近には所謂足助七城即ち眞弓山、飯盛山、城山、大觀音、臼木、黍生山、阿須利の諸城があつて、足助氏滅亡後は城主によつて、その根據を移動せしめた事があるようである。

松平氏の墓

高月院と松平氏墓

（松平村大字松平）

三河線　擧母驛＝乘合自動車＝自動車

高月院は淨土宗に屬し、正平二十二年足助重宗の二男寛立の創立と謂はれ、德川氏の祖先親氏が寛立に歸依して菩提寺としたと傳へてゐる。寺内の松平氏墓は西北の丘陵に據つて南面し、百五坪の塋域に親氏、泰親及長親の母閑照院の寶塔三基が一列に並び、その周圍は石柵を以て圍まれてゐる。舊時は百石の寺領を有し、本尊は親氏寄進と傳へる彌陀の立像で、寺寶には佛畫、佛像、古文書の類がある。

賀茂縣有模範林

（賀茂村）　三河線　中金驛＝乘合自動車＝自動車

日露戰役記念として、基本財產の造成及び造林の模範を示す目的を以て明治三十九年から杉、扁柏、黑松、落葉松等の植栽を行ひ、大正四年全部を完了したもので總面積は九百九十餘町歩である。初めは賀茂村の部落有林で、明治四十年から向ふ百ケ年存續期間の地上權設定地であつたが、大正五年縣が之を讓りうけ、爾來年々多額の事業費を支出し、蔓切、枝打、除伐、間伐、防火線、刈拂等の各種作業を施行する共に、林道の新設修繕、貯木場の新設防火巡視等を行つてゐる。

北設樂郡

田口町

人口四千を有する山間の都邑で、この地方に於ける物貨の集散地である、近年田口鐵道の開通によつて頓に活氣を加へ商況盛である。町内の福田寺は臨濟宗に屬する禪刹で境内に武田信玄の墓と稱する小五輪塔がある。野田城で銃丸に傷付いた信玄が傷痍の身をおして此の地に來り、當寺に逗留して遂に逝去したと傳へられてゐる。

主なる官公署

田口警察署、蠶業取締所田口支所　田口木炭檢査所

段戸の御料林と田峰觀音

（段嶺村）　田口線　田峰驛＝徒歩

六千八百町歩の廣大な面積を有する御料林で良材を出す。林中には一千米を超ゆる高峰があり。珍稀な植物も多くまた溪流には山椒魚が棲息してゐる。豊川の上流、寒狹川は此處に源を發してゐるが、其の清らかな水と奇勝は仙境に遊ぶの感がある。

田峰觀音は文明二年城主菅沼氏の建立せるもので、本尊は行基の作と謂はれ、夫婦の契りや福德念願に靈驗あらたかなりとして賽者が多い。寺寶には文明十三年在銘の梵鐘と永祿年間の制札がある。

乳岩及び乳岩峽

（三輪村大字川合）　鳳來寺線　三河川合驛＝徒歩

鳳來寺鐵道川合驛から北方約二粁の處に全山が第三紀時代の流紋岩質凝灰岩より成る乳岩山がある。山中の乳岩と稱する大洞窟は中央部の高さ約十米、幅十八米、深さ十六米で、上床から乳房狀の鐘乳石が垂下してゐる。此の他目莱岩、胎内潛、新穴等と稱する洞穴や天然の大石門がある。高さ二十三米、奥行は五米乃至九米、低部七米を有し乳岩山中唯一の奇觀である。こゝから

流れて三輪川に合流する乳岩川は全部が岩石から成る峽谷で、兩岸の翠緑は透徹する清冽な流れに和し、本縣屈指の勝地をなし今天然紀念物及び名勝に指定されてゐる。

乳岩及び乳岩川

前に大き く見るゆ 中で岩壁 央の稍上 方後上稍 岩乳はゆ

茶臼山

（豊根村大字坂宇塲字川宇連）

鳳來寺線　三輪村驛＝乘合自動車＝自動車

三河と信濃との國境に跨る標高一千四百十五米の高峰で、縣下唯一の新時代噴火山である。

此の山は初め玄武岩が噴出して新火山岩である富士岩の噴出する基底をなしたもので、玄武岩は緑黑色玻璃狀の石基中に緑色又は黃褐色の班晶を有してゐる。而して此の玻璃岩は次第に緑色粒狀の富士岩に移り化し、之が主體となつて茶臼山を構成してゐる。この富士岩の外觀は多少玻璃質で稍紫黑色を呈する緻密堅硬な岩石であるが甚だ粗面狀である。山中の轉石中には玄武岩質富士岩か富士岩質玄武岩か何れとも見定めのつかないものが多い。

川宇連の花ノ木

（豊根村大字坂宇塲字川宇連）

鳳來寺　線三輪村驛＝乘合自動車

花ノ木は全國に餘り見ない珍らしいものであるが。本縣と岐阜縣には比較的多く地方的特色を有する植物である。もみぢ屬の一種で四月上旬に花を開く。花は小さく濃赤紫色を呈するが、遠望すれば極めて美しく、里人は花ノ木と云はずに蘇枋ノ木と稱してゐる。尹良親王を祀る神社の社域に群落をなして生育し、今天然紀念物に指定されてゐる。

津具金山

（下津具村）　田口線　三河田口驛＝乘合自動車

最初の採掘は遠く戰國時代、武田信玄が三河の地に侵入した時に遡つてゐる。此地に金鑛を發見した信玄は直に甲州から坑夫、熟練工を派して盛に採取した。當時の所謂甲州金の一部は此の金鑛からとつたと謂はれ、その遺址と傳へるものが今に殘つてゐる。

その後永年廢坑の儘捨てられてゐたのを、明治、大正の兩時代に各一度試みられたが、製錬上の技術的困難にさへぎられて失敗に終り昭和に至つて遂に成功し今や三十萬坪に餘る鑛區は日々鶴嘴の音をきく。

南設樂郡

新城町

豐川線　新城驛

豐川の西岸に位し人口八千を有する郡内の首邑で、木材、繭其の他物貨の集散地となつて居る。

この地はもと菅沼氏七千石の陣屋のあつた所で古くから能樂が盛であつた。鄕社富永神社の境内に在る能舞台は享和二年の建造で、其の造營は當時幕府の舞台を密かに模したと謂はれ、當社に古い假面を數多所藏してゐる。附近に豐川の清流と櫻樹を以て誇る櫻ケ淵公園がある。左岸の蜂ノ巢岩は深淵に臨んで絕壁をなし奇岩を以て知られてゐる。

主なる官公署、學校

新城警察署、蠶業取締所新城支所、新城木炭檢査所、愛知縣新城農蠶學校、愛知

野田城阯

（千郷村大字豊島字本城）　豊川線　野田城驛

永正十三年菅沼定則の築くところで、後ち今川氏の所屬となつたのを、その孫定盈一旦恢復したが、天正元年武田信玄に攻められ遂に開城し、これより廢墟となつた。

信玄は此の時城兵の奏する笛の音に率かれてその狙撃に中り卒するに至つたと傳へられてゐる。現在遺阯は概ね耕圃と原野になつてゐるが、本丸の井戸と濠壘の一部が殘されてゐる。

長篠城阯

（長篠村大字長篠）　鳳來寺線　古城阯驛

此の城は永正五年今川氏親の武將菅沼元成の創築せるもので、三輪川と寒狭川の合流する突角の地を占め、左右兩面は自然の斷崖で背面に山を負ふた

要害である。

長篠城阯　（右）三輪川（左）寒狭川の合流點を隔てて城阯を望む

元成五世の孫正貞は武田信玄に改められて之に降り、天正元年七月德川家康に襲はれて遂に城を棄てた。家康は武田氏が之を奪還せんと計るを豫期し、奥平貞昌を城主として大いに陣容を固めた。果せる哉天正三年五月武田勝頼一萬五千の大兵を率ゐて來り圍むところとなつた。甲軍は城の堅固にして容易に拔く能はざるを見て遂に柵を城外に廻して長圍の計畫を樹てた。然るに城中糧食に乏しく家康に援を請はんと鳥居强右衛門勝商が密かに重圍を脱出して岡崎に使し、歸途甲軍に捕へられて壯烈な最期を遂げし

ここは人口に膾炙する所である。

戰後貞昌は名を信昌と改め、翌四年新城に轉じたので、それより城は廢墟となつた。

遺阯は鳳來寺鐵道に依つて二分せられたが、尙ほ本丸、二之丸、三之丸彈正廓、野牛郭、瓢郭等の遺阯が現存し、何れも田畑や宅地になつてゐる。本丸は今公園となり長篠城阯の碑も建てられ史蹟に指定されてゐる。

附近には鳥居强右衛門墓を始め、此の戰役に關係した史蹟が頗る多い。

鳳來峽

（南設樂郡、八名郡）　鳳來寺線　湯谷驛

豐川の上流で、乳岩峽の下流から八名郡大野町附近に至る三輪川の沿岸一帶の峽谷を總稱して鳳來峽といふ。峽底は岩石を以て疊まれ、清麗な水は兩岸の翠崖と相映發し峽中また奇勝多くて趣致に富み、湯谷溫泉附近に於いて殊に卓越してゐる。

鳳來寺山と鳳來寺

（鳳來寺村大字門谷）　田口線　鳳來寺驛

鳳來峽　左方家屋は湯谷溫泉

鳳來寺山は最高峰を瑠璃山と稱して標高六百九十米を有し、火山岩を以て構成してゐる。之は第三紀時代に海底に噴出した流紋岩の塊狀火山で、表面は海水の爲に冷却して、眞珠岩、松脂岩等を生じたが、後ち海底は陸地となり、風化水蝕の作用をうけて流紋岩の一部が表面に現はれ、現時の山形を呈するに至つた。山勢は峻峭で巉岩聳立し往々數十米の斷崖をなす。

山腹に眞言宗に屬する古刹鳳來寺がある、その創建は文武天皇の朝に、利修仙人が天皇の御惱を加持し奉つて靈驗

著しきところから、勅によつて建立されたと謂はれ、本尊藥師如來は利修が七本杉を伐つて自ら彫刻せる尊像と傳へられる。其の後源頼朝に依つて再興せられ、所謂三河七御堂の隨一である。また鳳豐臣秀吉より寺領三百石の寄進もあつたが、殊に德川廣忠は此の藥師佛を篤く信仰し、家康はその靈告に依つて產れたと謂はれてゐる。德川時代には寺領一千二百石を有し諸堂宇の造營もあつて頗る隆盛を極めたが、近年火災に遭つたので、今は往時の盛觀を見ることが出來ない。

鳳來寺山　鐘樓附近

本堂に到るには山門のあたりから一千三百の石磴を踏むのであるが、その間削り立つ岩壁の間に動脈のやうに縺り

込まれた幽谷を透して旺時を偲ぶ累々たる僧坊の石垣を見る。本堂から少し離れて東照宮がある。今は獨立して鄕社となつてゐるが、社殿は所謂權現造の華麗なもので境域亦幽邃である。更に奥の院に登ると山氣は愈々澄明で、山腹に見るやうな暖地性植物に乏しく、針葉樹が多くて寒地の景觀を呈してゐる。其處の廣濶なる岩上に立てば眼下に豐川の蜿々と白く這ふ東三の平野から、渥美半島を越えて遙か蒼海杳渺たる太平洋が雙眸にあつまり、其の風景は實に雄大である。

山中を通じ、溪谷は花草羊齒の種類に富み、岩壁には石耳蘭等の岩生植物群生し、林中棲息の動物も亦多く、佛法僧は殊に名高い。今名勝及び天然紀念物に指定されてゐる。

こからしに岩ふきさがる杉間かな　　芭蕉

寶飯郡

宮路山

（赤坂町）　愛電線　赤坂驛＝徒歩

持統天皇が三河に御幸の際頓宮が營まれたので、宮路山と稱すると傳へられる標高三百六十二米の山で、古來紅葉の名所として知られてゐる。行宮の遺阯と稱するものは岳ヶ城に在るが固より定かでない。山頂は四圍の眺望に富み其處に草壁皇子の創建と謂はれる宮道天神が鎮座する。

しくれけりそむる千入のはてはまた紅葉のにしき色かへるまで　　阿佛

夏の月御油より出て、赤坂や　　芭蕉

三河國分寺阯

（八幡村大字八幡）　愛電線　國府驛＝自動車

聖武天皇の御宇建立された三河の國分寺で、遺阯の大半は民家や耕地となり、一部に曹洞宗に屬する國分寺がある。この寺は永正年間僧機外の再興したもので、鐘樓に懸けられてゐる梵鐘は無銘であるが、國分寺創立當時の鑄造と謂はれ、今國寶に指定されてゐる。寺域には大きな礎石が土壇の叢に殘り、西北には築垣の名殘が嚴然と殘されてゐる。尙ほ東北三四町の處に三河國分尼寺阯がある。其處に曹洞宗の寺が現存し、寺内の林叢中には土壇や礎石等も存して國分寺阯と共に今史蹟に指定されてゐる。

國幣小社　砥鹿神社

（一宮村　字一宮）　豐川線　三河一宮驛

大己貴命を祀る三河の一ノ宮で、社叢は豐川流域の低地に沿ふた高臺に在る。奥宮は標高七百八十九米の本宮山上に鎭まり神社の北方約二里のところにある。社傳に依れば文武天皇の大寶年中に草鹿砥公宣が神託に依つて奉祀したもので、舊時百二十石の神領を有し、明治初年まで公宣の子孫と稱する草鹿砥氏が奉仕してゐた。

一萬六千坪に餘る神域は老杉鬱蒼として深嚴を極め、賽者をして自ら襟を正さしめる。三河第一の大社である。

豐川閣と豐川稻荷

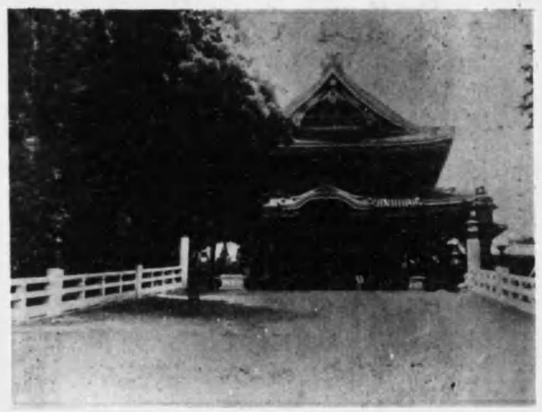
（豐川町大字豐川）豐川線　豐川驛

祇鹿神社

豐川閣とは曹洞宗の巨刹妙嚴寺のことで、嘉吉年間僧東海の開創したものである。寺域廣く諸堂宇宏壯で、庭園また兼る。雅幽邃である。舊寺領四十五石を有し國寶地藏菩薩木像二軀を藏してゐる。

豐川稻荷は此の寺の鎭守として咤枳尼天を祀つたもので、織田、豐臣、德川の諸將が厚く之を信仰したといはれてゐる。

豐川驛から門前に至る四五町の間は土產物店や旅館が軒を並べ、賽者は陸續として踵を絕たない。



妙嚴寺吒枳尼天堂　豐川稻荷

三河海苔（前芝村）

嘉永六年前芝村の人杢野甚七が海濱に蛤を畜養せんと其の周圍に葦簀を立て廻して之に海苔の附着するを發見した。之が三河海苔の濫觴である。爾來海苔の採取は漸次隣村にも波及して發達したが、依然として前芝附近に盛で其の產穫は五十萬圓に達してゐる。尙ほ附近で採取された海苔は一旦此の地に集められ、加工せられて後ち各地に移出される狀態で、其の額は優に一百萬圓を超えてゐる。是等製品の檢査は從來愛知縣水產會及び三河海苔同業組合に於いて行はれてゐる

たが、昭和八年度より縣營檢査が實施されてゐる。

縣社　菟足神社

（小坂井町大字小坂井）　豊川線　小坂井驛

穗の國造菟上足尼命を祀る延喜式内社で、白鳳十五年の奉齋といはれ、舊時は社領九十五石を有した。

此の社には風祭と稱して人身御供の遺風が殘り、中古から猪や鹿を生贄として奉つた。大江定基が三河守として赴任中、此の風祭に猪の生贄を見て興が覺め此の國を去らうとしたことが宇治拾遺物語に見えてゐる。今は一年の月數だけの雀を生贄として供することになつてゐるが、此の雀を捕獲するには神職自ら弓を執るのである。

尙ほ社寶には慶安三年の梵鐘　安元治承年間の跋文ある大般若經、古い懸佛、棟札、古文書などがある。

國府町

愛電線　國府驛

人口六千の都邑で東海道に沿ひ、舊時東海道五十三次の一驛として般賑を極め御油町、赤坂町に續いてゐる。産業は蠶糸類が最も盛で生産額八十萬圓に達する。

此の地は往昔三河國廳の在つた所であるが、今其の跡地は明らかでない。大字白鳥に鎭座する縣社總社は國衙に附屬せる社であつた。

主なる學校、工場

愛知縣國府高等女學校、竹本製油所

三谷町

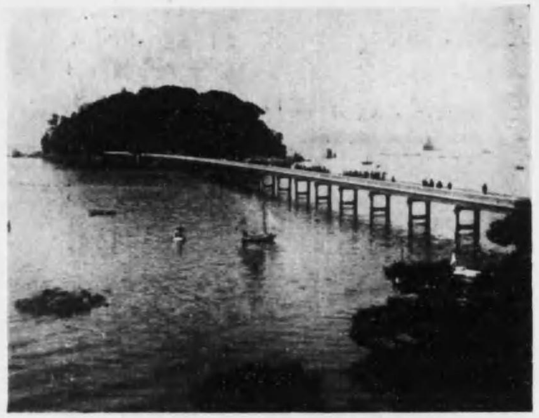
東海道線　三谷驛

人口七千の小都邑であるが、古來三河木綿の産地として、又鮮魚の集散地として産業方面に頗る活動的な町である。織物業は歐洲大戰後急激に發達し

て現在其の生産額五百萬圓に上り、漁業は遠洋漁業を合せ其の漁獲高二百萬圓に達してゐる。

これ等の指導機關として三河染織試驗場と愛知縣水産試驗場分場がある。又特殊施設に同町機業の共同炊事場があり作業狀態がよく統一されてゐる。

尙ほ縣下三大漁港の一と稱せられ船の出入に極めて便利である。



蒲郡海岸の風景　常磐館より竹島を望む

蒲郡の海岸（蒲郡町）

東海道線　蒲郡驛

三面に翠巒を負ひ、前面は渥美灣に臨んで遙か渥美半島に對し、大島、小島、佛島等を遠景に、近く竹島が繪の如く浮ぶ。その風景は東海一と稱せられ、氣候また温和なる上空氣が清澄で海水浴に、避寒に格好の地である。城山の上には古代建築に模した屋根を有つ鐵骨コンクリート造五階建の國際觀光ホテルがあり、その下には旅館常盤館がある。孰れも展望は秀絶で施設の完備と共に誇るに足るものがある。

國際觀光ホテル

附近には往古藤原俊成が逍遙したと謂はれる戀の松原や源義家手植と傳へる清田の大樟がある。殊に大樟は東海に於ける代表的なもので、今天然紀念物に指定されてゐる。

竹島は面積三百八アールの小島で、磴を登りつめた處に市杵姫命を奉齋す

る鄕社八百富神社がある。社叢は古來斧鉞が加へられなかつた爲め、全島は鬱蒼と樹木に包まれ、所生の植物は暖地性のものが多く對岸の植物とは趣を異にしてゐるので、今天然紀念物に指定されてゐる。

尙ほ此處には篠島を經て伊勢二見に至る定期航路がある。

渥美郡

岩屋觀音

岩屋觀音

（二川町大字大岩）　東海道線　二川驛

東海道線二川驛の西、北側に花崗岩山の奇勝がある。その山嶺に猪牙の如く直立する觀世音の像は更に人目を惹く。この觀音は明和二年江戸下谷の講中に依つて建てられた丈餘の銅像で突兀する八十尺の巖上に安置されてゐる。山腹には千手觀音を本尊とする大

岩寺といふ寺がある。舊時は參勤交代の街道筋に當り賽者も多かつたが、今はさして盛でない。

昭和二年今上陛下豐橋に行幸の際畏くも御登攀あらせられた聖蹟で、景勝の地として知られてゐる。

普門寺（二川町大字谷川）　東海道線　二川驛＝自動車

行基の開基と傳へられる眞言宗の古刹で、いま船形山の東腹に在る。もとは船形山の上方、今の元堂と稱する所にあつたが、安元年中燒失したので、文治年間現地に移して再興されたと謂はれてゐる。藤原時代の製作にかゝる木造阿彌陀如來坐像、同釋迦如來坐像、同四天王立像は久壽三年在銘の經筒一口及び鴛鴦花唐草文の白銅鏡一面と共に今國寶に指定されてゐる。此の他大治年間の跋文ある大磐若經の所藏もあつて、往古宏莊な堂閣伽藍の營まれてゐたことが窺はれる。德川時代には百石の寺領を有してゐた。

東觀音寺（二川町大字小松原）　東海道線　豐橋驛＝乘合自動車

行基の開基と謂はれ、臨濟宗に屬する巨刹である。鎌倉時代作の阿彌陀如來坐像と大永年間に造營された多寶塔は國寶に指定されて居る。其の他文治年間から建久年間に亘つて寫された大磐若經六百卷や文永八年地頭安達泰盛の施入した美事な掛佛もある。是等に依つて當代に於ける本寺の繁榮を知ることが出來る。舊時は百二石の寺領があつた。

田原町　渥美線　三河田原驛

田原灣に臨み、水陸交通の要衝に當る。一萬四千の人口を有する郡内の首邑で市況旺盛を極め、産業はセメントの六十七萬圓、飴の二十六萬圓、蠶絲の二十三萬圓を其の主なるものとする。

城寶寺境内には幕末の志士として、また畫家として知られた渡邊華山の墓

がある。華山は田原藩の家老で、藩主戸田康直に仕へて内政上に力を傾倒し、外國事情を研究し卒先して開國論を提唱する等其の一生を藩政と國家の爲めに献げ、天保十二年自盡して歿した。邸阯は池ノ原公園として今に保存されてゐる。

主なる官公署、學校、會社、工場

田原警察署、愛知縣成章中學校、田原高等技藝女學校、三河セメント株式會社、伊藤製飴所

田原城阯

（田原町）

明應年間戸田宗光の創築以來戸田氏五代の居城であつたが、天文の初め松平清康に攻あられて之に降り、同十六年今川氏に城を奪はれて一門は沒落した。今川氏は城代を置いたが、永祿七年本多廣孝に攻められて之を捨てたので之より德川氏の領するところとなつた。天正十八年池田輝政ゝ臣某城代となつたが、慶長五年池田氏姫路に轉封ゝ共に戸田尊次が之に代つた。其後寛永四年に至り三宅康勝が舉母城から移つて一萬二千石を頒した。爾來康雄、康德、康高、康之、康武、康邦、康友、康明、康直、康保と相繼いで維新に至り、廢城となつたものである。

今本丸は耕されて畑地に變り、二之丸は兒島高德と三宅康貞を祀る縣社巴江神社の神域となり、三之丸は公園となつてゐるが、大體遺構は比較的よく保存されてゐる。

伊良湖岬（伊良湖岬村）

渥美線　三河田原驛ニ乘合自動車

渥美半島の尖端で、もとは島であつたが、後ち陸續きになつたゝいはれ、古くからの名所で萬葉集にもその名が見えてゐる。

西は神島を挾んで志摩の大王崎に對し煙波の間に志摩、伊勢の山影をながめ、南は杳渺たる大平洋で、洋上から打ち寄せる狂瀾の怒濤が岩壁を撞き萬

雷の音を發して碎けるさまは名狀し難い壯觀である。

伊良湖岬の突端

此の岬の東方二粁のところに日出の石門があり、附近には濱おもと等の暖地性植物の群落地がある。

石門の北側、翠松茂る山の中腹に見晴臺がある。脚下に沖ノ石門、赤龜、塔ノ下、天狗岩など海上に碁布し、縹渺たる大洋は水天彷彿として氣衆頗る濶大、實に雄大な風景である。之に反し内灣は女性的な曲線を描く青松白砂の海濱で大部分は今陸軍の試砲場となつてゐる。

また其處には歌人磯丸の墓がある。磯丸は此の浦の漁夫で中年から和歌を學び、遂に一家をなした人で、伊良湖の風景が生んだ歌人と云ふべきである。

萬葉集

潮騷に伊良湖の島邊榜く船に妹乘るらむか荒き島回を　人麿

伊良湖さき浪より外による人もなきさにわふるあまの身そうき　磯丸

鷹ひとつみつけてうれしいらこさき　芭蕉

大正悠紀地方風俗舞歌

君か世のめくみうれしみいらこ島あまの子らさへうたふ聲する

福江町

渥美線　三河田原驛＝乘合自動車

渥美半島の突端に近い港市で人口一萬三千を有し、半島西部に於ける貨物の集散地である。明治四十三年附近に陸軍試砲場が設けられて以來、特別國道六號、七號の二線も新設せられて道路の完備を見るに至つた。

港は深く灣入する免々田川の河口にあつて本縣三大漁港の一つといはれる

る。移出入貨物の主なるものは水産物、蔬菜、肥料、木材等で其の價額百萬圓に達し、主に名古屋、豐橋、伊勢、紀伊、靜岡と取引が行はれてゐる。名古屋、蒲郡、龜崎、鳥羽に定期航路がある。

八名郡

阿寺の七瀧

（山吉田村大字下吉田字阿寺）
鳳來寺線　三河大野ヨリ驛自動車

阿寺の七瀧　下より第一・二・三・四の瀧を見る

阿寺より巢山に通ずる道路から北方の溪流に沿ふた山路を一千米も登ると七瀧に達する。深山幽谷の懸崖にかゝる瀧は七段に折れ、白簾を垂れる如く或は白布を晒すが如く落下して實に奇觀である。下から第一の瀧は高さ九・三米、第二は

一・三米、第三は七・五米、第四は二五・五米、第五は二米、第六は四米、第七は二米であるが、水勢急なる爲に瀧壺は深く浸蝕せられ入浴に適せざるものもある。瀧下の溪流に沿ふ道路の西岸に峙つ懸崖絶壁は何れも第三紀時代の圓礫岩で、石楠、卷柏、葛、蔓等を生じて佳景を呈し、今名勝及び天然紀念物に指定されてゐる。

黄柳の自然林

（山吉田村大字黄楊野）
鳳來寺線　鳳來寺口驛＝自動車＝徒歩

黄揚野一帶は黄柳樹が多く自生するところから此の名が付けられたのである。此の天然林は雜木混生林で黄柳樹の密生する所と疎生する所があるが、大體に見にて四十町歩に近い範圍に亘つて自生する珍らしいものである。從來十年目毎に廻り三寸以上のものが伐採されてゐたので、今その大木を見ることは出來ない。

富賀寺（八名村大字中字利）

豐川線　新城驛＝自動車

大寶年間行基が杉材を以て彌陀、藥師、觀音、地藏の像を刻み、始めて一宇を建立したと謂はれる。後ち南北朝の頃、足利尊氏が時の住僧眞應と從兄弟の關係から此の寺を祈願所となし、自筆の願文と寺領を寄せ、又堂塔七宇、宮祠十八社、坊舍十八棟を建立したと謂ふ。其の後數度の火災に罹つて漸次衰頽し、今は僅かに本堂　護摩堂等數宇を止むるに過きない。

寺寶として由絡ある佛畫や永德年間の大般若寫經を襲藏してゐる。

縣社　賀茂神社（賀茂村神山）

東海道線　豐橋驛＝乘合自動車

祭神は賀茂別雷命で、文治年間、源頼朝が社殿を再建し神領を寄進したと謂はれ、永祿十一年德川家康、遠州三方原へ出陣の際大旗を奉納して戰捷を祈り、また長篠の役にも祈願したと傳へられてゐる。

舊時は社領百石を有し、社寶の家康奉納の大旗は寛文年間に再調せられたものである。

石卷山（石卷村大字石卷）

東海道線　豊橋驛＝乘合自動車＝徒歩

三河に奇山なし唯だ一つ石卷山あるのみ、こ林鶴染が述懐したといはれる山で古生層の石灰山である。山頂は廣濶で天狗岩、雄岩、雌岩こ稱する奇岩がある。これ等の岩肌にはマルテンギセル、薄皮マイマイ等の陸棲介やステゴビル、マネキグサ、クモノスシダ等の植物が着生してゐる。

また此處に鄕社石卷神社の奥宮がある。本社は山脚大字三輪に在つて、大已貴命を祀れる式内の社で、舊時は吉田城の鬼門鎭護として代々城主から崇敬せられた。

昭和九年十二月十日印刷
昭和九年十二月十八日發行

愛知縣

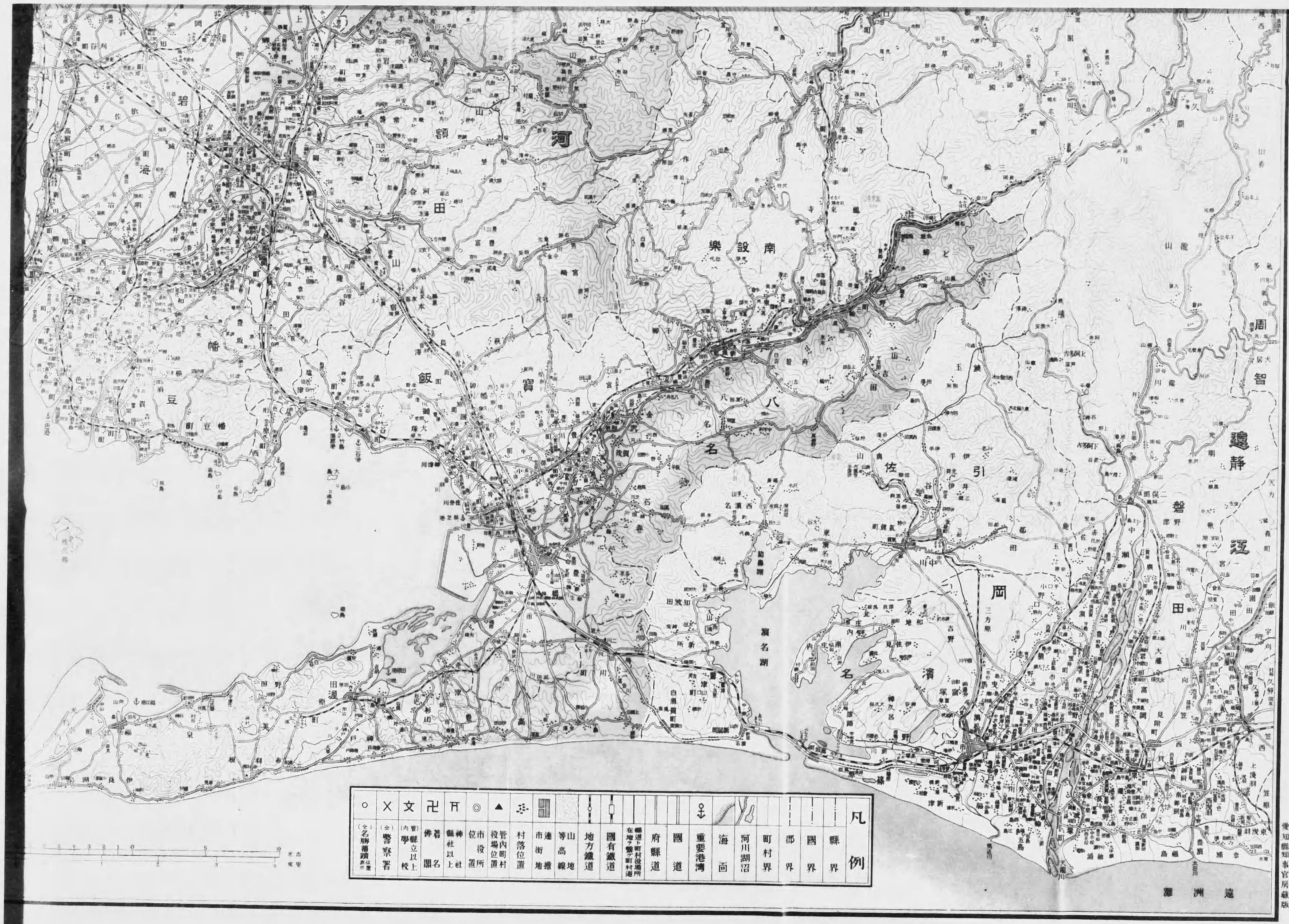
印刷人　名古屋市中區老松町五ノ八　岡田一夫

印刷所　名古屋市中區老松町八ノ五　千代田印刷株式會社
電話中③二八〇九番

愛知縣管內隣縣接續地方圖

縮尺貳拾萬分之壹

犬
山
滋
知
愛
神
崎
賀
生
蒲
甲
賀
三
重
伊
鹿
鈴
辨
名
海
部
尾
張
知
碧
額
西
加
可
岐
濃
春
日
井
東
春
日
井
西
春
日
井
羽
島
中
島
日
島
海
津
海
部
名
古
屋
尾
張
知
多
碧
海
額
田
愛
知
知
多
加
茂
可
児
岐
阜
各
務
羽
島
安
八
不
破
坂
田
養
老
員
弁
東
小
橋
上
山
田
鈴
鹿
亀
山
鈴
鹿
上
野
名
張
上
野
市
名
古
屋
市
大
野
町


凡例
縣界
國界
郡界
町村界
河川湖沼
海面
重要港灣
國道
府縣道
國有鐵道
地方鐵道
山地
高等線
連檐市街地
村落位置
役場位置
市役所位置
神社
縣社以上
佛閣
縣立以上學校
警察署
名勝舊蹟
碧海
豆田町
幡豆
飯田
寶飯
河合
山田
南設樂
八名
名古屋
名濃西
名濃
知多
名古屋
名濃
佐引
岡崎
額田
碧海
遠州灘
渥美
周智
磐田
遠江
遠州灘
愛知縣知事官房蔵版

伊
重
河
鈴
鹿
安
濃
一
志
南
飯
田
津
多
氣
會
度
知
多
碧
海
田
山
飯
豆
田
原
渥
美
志
摩
○ 佛閣名
卍 佛閣
文 縣立其他學校
× 警察署
○ 名勝舊蹟

終